

リンに憑依した男の ハーレム街道

アスパラーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだと思ったらリインに憑依していた!?

リインに憑依した女好きの男が原作女キャラに手を出す話です。R-18ではないです。私では表現できないので。

※更新は毎週日曜、たまに水曜日にもするとします。

目次

プロローグ	1
1 話：オリエンテーリング	13
2 話：クロスベル創立記念祭①	30
3 話：クロスベル創立記念祭②	45
4 話：クロスベル創立記念祭③	59
5 話：クロスベル創立記念祭④	71
6 話：クロスベル創立記念祭⑤	90
7 話：クロスベル創立記念祭⑥	97
8 話：クロスベル創立記念祭⑦	113

プロローグ

『……タ、トリスタ。まもなくトリスタです。お降りになる方はお忘れ物のないようご注意ください』

「……んあゝ。ついたか……」

車内放送で目が覚める。

伸びをして荷物の細長い包みを持ち、出口に向かった。

トリスタに到着し駅を出た俺は、立ち止まって周りを見回した。春らしいライノの花が咲き誇り、綺麗な町並みもあつて見惚れていた。

(ああ……やつとだ。)

長い間待ち望んでいたこの瞬間を、俺は今までのことを思い出しながら嘸み締めていた。

~~~~~

「……………は？」

目が覚めたら俺は見知らぬ場所ですべて寝ていた。

周りは洋風の金持ちの部屋のような場所だった。

（あれ？なんで俺こんなところにいるんだ？誘拐？いやいや、俺なんか誘拐して何になるんだよ。来年からフラン大学に通うただの高校生だぞ？）

あまりの状況に俺は困惑した。

そんな感じで色々考えていると誰かが扉を開け入ってきた。

「あ！お兄様?!目が覚めたんですか?!大丈夫ですか?!」

そう言って黒髪の超絶可愛い娘が近づいてきた。

（いやいやいや、近すぎませんか?!俺ロリコンじゃないけど君みたいな可愛い娘が近くにいたらさすがに反応しちゃうよ?!…………ん?というか、なんかこの娘見たことあるなあ……)

俺は黒髪少女を見つめながら思い出そうとした。

「あ、あのお兄様?そんなに私の顔を見てどうしたんですか?」

少し頬を赤くしながら黒髪少女は訪ねてきた。

「ん?ああ、なんか君の顔どっかで見たことあるなあって」

そう言うのと黒髪少女はすごく驚いた表情をした。え?どうしました?

「ま、まさか記憶喪失ですか!? そんな!? 本当にわからないんですか? 私ですよ! エリゼです! お兄様の妹の!」

黒髪少女は今にも泣きそうになりながら言った。

(は? エリゼ? 妹何を……あれ? その名前最近よく聞く気が………つあ!! あれか!! 最近やってたあのゲームの!……いやいや! 何でゲームのキャラが目の中にいるんだよ!)

俺はようやく思い出したが、余計に困惑した。それはそうだ。なんとってゲームのキャラが目の中にいるんだから。

(何でこんなことになってるんだ? 確か俺は高校が終わった後電気屋で閃の軌跡Ⅲを買って帰ろうとしたら………そうだ! その帰りに後ろから何かぶつかってきて………え? もしかして俺死んだ? あれか? 今流行りの神様転生ってやつか? いや神様なんてあってないからそれは違うか? というかさつきエリゼが俺をお兄様って呼んでたな。ということとは……)

そう考えると俺は部屋のなかを見渡し鏡を見つけ自分の顔を確認した。そして……  
(oh………リインさんじゃないですか。)

俺、死んだらリインさんに憑依転生しちゃいました。

それから俺は開き直ってリインとして普通にすごした。

原作と違うとしたらエリゼのことを可愛いがり過ぎて原作よりブラコン悪化したり、イケメンフェイスを利用して領内の女性や旅行者を口説いたり、仲良く夜を共にしたりしていた。そのせいか、親父は「シユバルツアー男爵は浮浪児ではなく、種馬を養子にしたようだ。シユバルツアー家は安泰ですなあ」と言われる事が多くなり、社交界にあまり行かなくなつた。原作ほど疎まれてはないようだが違う意味で行きづららしい。……なんかごめん親父。ユン老師に修行をつけてもらい、七の型【無】の免許皆伝者になつた。理に至るにはまだまだ駄目らしい、ユン老師にも「お主もうちよつと節操をだな……」と説教される。いやこれは性分なんでどうしようもないんです……と、色々あつた。

~~~~~

(あれから大変だつたな……。)

そう良い？ 思い出に浸っていると、背中に軽い衝撃を受けたと同時に「きやつ」という小さな悲鳴が聞こえた。

振り向くと、同じ赤い制服を着た女の子が尻餅をついていた。

(ああ、このイベントね。)

と納得した。何故かわからないが、前世でやった軌跡シリーズの記憶が未だに劣化し

ていない。まあこの先何があるか分かるからラッキー位にしか思っていないが。まあそれより今はアリサだな。

「悪い、道の真ん中で立ち止って邪魔だったな。大丈夫か？」

「気にしないで。私も花に見とれて、余所見しながら歩いてたから」

手を差し伸べて謝罪して、アリサの手を取り、立ち上がるのを手伝った。

（ふむふむ。柔らかいな。それに胸もなかなか。これは楽しみだな）

そんなことを考えながら、手をはなした。

「それにしても、制服の色同じなのね」

「ん？ああそうだな。確か、貴族生徒が白で平民生徒が緑だったはずだが……もしかしたら新設のクラスか何かかもな」

「そうかもしれないわね。これからよろしく。名前聞いても良いかしら？私はアリサ・ライン……ん、んっ！アリサ・Rよ」

「ああこちらこそよろしく、アリサ。俺はライン・シユバルツァー」

お互いに自己紹介して握手した。

「うん。よろしくライン。……あれ？何かどこかで聞いた名ね？」

「ああ、一応有名だからね、悪い意味で」

「へえ、そうなの？なんていわれてるの？」

「ユミルの種馬」

「は？……え？も、もしかしてあつたら最後孕ませるまで逃げられないって言うあの？

……きやああああ!!ちよつと！近よらないで！変態！」

そう言うのとアリサはもの直ぐ様リインから離れ自分を抱きながら睨んできた。

「おいおい。酷すぎないか？大体あの噂はほとんど嘘だ」

「そ、そうなの？」

「ああ。確かに俺は大勢の女性と行為に及んだが誰でも良いってことはない。好みじゃないやつとやるほど俺は女好きじゃないしな。無理矢理したことはないし、避妊もちゃんとするし何よりちゃんと最初に遊びだからと言っている。健全だ。」

「あんまり変わらないじゃない!？」

「何でアリサがそんなに怒るんだ。もしかして俺のことが好きにでもなったか？」

「は、はは、はあ!?!何言ってるのよあんな!?!そんなわけないでしょ!?!」

「そうか？俺は好きだぞ？アリサのこと。」

「は？……な、何言ってるのよあんな!?!」

「俺、アリサにあつた瞬間好きだと思って思ったんだ」

「どうせ遊びでしょ！私は遊びなんかで抱かれるほど安くないわよ!?!」

「遊びだったらそういうさ。俺、本気でアリサのことが好きなんだ。本気で好きになったの、アリサが初めてだ」

「ちよ、あんた、何……」

「アリサ……」

「ちよつと、まて！ち、近い……」

「……………」

リインはゆっくりとアリサに近づいていった。遂にアリサは壁まで追い詰められ、リインはアリサの足の間に片足を入れ、アリサの顔の横に手をつき、顔を近づけた。

そして……

「……………近いつて言っでんでしょっ!!」

「がふっ!」

リインの顎にアリサの見事な掌底が放たれ、リインは崩れ落ちた。その隙にアリサは全速力で学院に向かって走っていった。

（さすがにまだはやかったかな?……それにしても良い掌底だった。アンゼリカ辺りにも教わったのかな?……余計なことを）

そんなことを考えながらリインも学院に向かった。

……のだが、途中でベンチで寝転んでいる娘を見つけ、そちらに向かった。

（お？ やつぱりファイーか。……ふむふむ。本当に猫みたいだな。まあそれが可愛いんだが）

ファイーの頬をぶにぶにしながら、ファイーの可愛さを堪能していた。暫くそうしてると、さすがに気づいたのかファイーはゆっくり目を開けた。

「……………おはよう」

「うん。おはよう」

「……………おやすみ」

「おいおいそろそろ行かないと遅刻するぞ？」

「めんどい。送って」

「いいのか？俺が運ぶといろんな所さわ…………「やつぱりいいや、なんかイカ臭い…………」…………え？本当？そんな匂う？おかしいな…………毎日体洗ってんだけどな…………ってあれ？」

リインが自分の体臭を確認している隙にいつの間にかファイーはいなくなっていた。

「……………ふつ。さすがは猟兵ということか」

1人そんな事を言ったリインは少し寂しそうにしながら学院に向かった。

今度こそちゃんと学院に向かった。リインは校門に到着した。

(ここがトールズ士官学院。ここで俺のハーレム生活が始まるのか……)

立ち止まり物思いに耽っている。

「ご入学、おめでとーございますー！」

と、小柄な少女がリインに声をかけ、作業服を着た男性も追従し近づいてきた。

「うんうん、君で最後までいだねー！」

少女は納得したように何度も頷いた。

(おおートワ会長とジョルジュ先輩だ！全然年上に見えないな。……よし、少しからかってみるか)

リインは少し屈んでトワと目線の高さを合わせた。

「こんなところでどうしたんだいお嬢ちゃん？迷子にでもなったのかい？」

「え？……」

そう言うのとトワは何を言われたか理解できないなか呆けていた。リインは次にジョルジュに声をかけた。

「この子の親御さんを探してるんですか？」

「い、いやあそれは違うかな……」

「なるほど……ああ！分かりましたよ。教員か誰かのお子さんですね？駄目だよお嬢ちゃん。学院が珍しいのは分かるけどあんまり歩き回ってちゃ。親御さんが心配しちゃうよ？」

リインはトワの頭を撫でながらそう言った。

するとトワは子供と思われてるとわかったのか少し興奮しながら訂正した。

「こ、こどもじゃないよ!!?確かに背はちっちゃいかもしれないけどこの学院の生徒だよ!!?それに君よりも年上だよ!!」

「はっはっは！元氣だなあお嬢ちゃん。けど、嘘は感心しないなあ。お兄さんが着いていってあげるから親御さんの所に戻ろう？」

「むく!!もうっ！違うって言うてるのに!!?ジョルジュ君も言うてあげてよ!!」

トワは頬を膨らませながら、ジョルジュに助けを求めた。

「はは……。そのくらいにしてあげてくれないかな？そろそろ入学式も始まるし」

「ん?そうですね。からかうのはこのくらいにしときますか」

「え?………もくうっ!!君、初対面なのに意地悪にもほどがあるよ!!」

「あはは、すいません。あなたがあまりにも可愛らしかったんで」

「むくまたそんな嘘言つて！」

「いやいや、本当ですよ。とても可愛いです」

「くっ！／＼／＼」

トワ顔を赤くしながら落ち着きなくきよろきよろきしていた。

「そのぐらいにして本題に入ろうよ。改めて入学おめでとう。ライン・シユバルツァー君、で大丈夫かな？」

「はい。大丈夫ですよ？……それにしても意外ですね。自分の名前を知っても普通なんですね」

その疑問にトワが答えた。

「ん？ああ噂は知ってるよ？けど噂は所詮噂出しね。その人のことは自分で見るまで本当にどんな人か分からないもん」

トワはなんてことないように答えた。

「……………すごいですね。もう俺あなたのこと好きになりました。付き合ってください」

あまりにトワがいい人過ぎて思わず告白してしまった。

「え!? つ、つつ付き合うってそんないきなり……」

「はいはい、そういうの歩後にして。あ、僕の名前はジョルジュ・ノーム。でこっちがトワ・ハーシエル。よろしく」

「はい。よろしくお願ひします」

「うん。それでね、学院で荷物を預かることになってるから渡してもらえるかな？ 後でちゃんと返すから」

「ああ大丈夫ですよ」

そう言つてリインは長い包みを渡した。

「確かに。入学式はあつちの講堂で行われるから遅れないようにしてね」

「分かりました。それじゃあ失礼します」

そう言つてリインは講堂に、向かった。

「付き合うつて言われてもまだあつたばかりだしそれに、う／＼／／／……あ、あれ!? リイン君は!？」

「もう講堂に、いっちゃったよ?」

「つ!／／／もうつ! またからかつて!!」

1話：オリエンテーリング

「——えたれ」

(あ、やべ！聞き逃しちまった！ドライケルス大帝の名言だけは聞こうと思ってたのに……)

1人どうでもいいこと考えてる中、入学式が終了した。

「うーん、いきなりハードルを上げられちゃった感じだね？」

悔しそうにしてたら、横から声をかけられた。その声に隣を見ると、赤毛の少年がいる。

(…て、エリオットじゃないか！本当女顔負けの可愛さだな。俺に男色の気があつたら確実にいつてたな)

くだらないことを考えながらエリオットに言を返した。

「ああ、そうだな。だがそれぐらいの方がやりがいがあるつてもんだろ？」

「あはは、やる気十分だね。僕はエリオット。エリオット・クレイグ。よろしくね」

「よろしく。リン・シユバルツアード」

「ええ?!あの噂の?」

「その噂のだが、あんまそれを言わないでくれると助かる」

「そ、そうだよね。ごめんね？」

「いや大丈夫だ。複数の女性と交わったのは確かだからな」

「あはは……。そうなんだ」

エリオットは何とも言えない表情をした。

『以上でツールズ士官学院、第215回入学式を終了します。』

その後、指定されたクラスへ移動するよう通達され、解散となった。

「指定されたクラスって……入学案内書に書いてあったかな？」

「いや、無かった。この場で発表されると思っていたんだがな」

と、話していると……

「はいはい。赤い制服の子達は注目〜！」

ワインレッドの髪の女性の声が講堂に響いた。

「実は、ちよつと事情があつてね。君たちにはこれから特別オリエンテーリングに参加してもらいます」

（うわっ！サラ教官エロすぎだろ！あの胸元と短いスカートとタイトの間から覗ける太腿！くそっ！さすがA級遊撃士。《紫電》の名は伊達ではないな……）

「……れじゃあ全員、あたしについて来て」

残っていた赤い制服の人全員サラに続いて講堂から出ていった。

移動中、視線を感じたリインは振り向き、崖の上を見た。

(あれは……クロウとアンゼリカ先輩か。ふむ……。アンゼリカ先輩のせいで間接的にアリスの邪魔されたし今度仕返ししようかな)

アンゼリカにする仕返しをニヤニヤして考えながら、リインはみんなの後を着いていった。

~~~~~

「っひ!!」

「?どうした?」

「い、いや。少し寒気がしたただけだよ」

「なんだ風邪か?気を付けろよ」

「ああ。(なんだったんだ?まるで手配魔獣に睨まれたような……)」

~~~~~

旧校舎についた後、クラスの説明や貴族風情がーとか平民風情がーとかのお話があつ

た。まあ面白くもない男同士の話なんて興味ないから描写なんかいらぬよね？

「はいはい、そこまで。色々あると思うけど文句は後で聞かせてもらおうわ。そろそろオリエンテーリングを始めないといけないし……さっそく始めましょうか♪」

サラは謎のスイツチを押すと、床が傾いた。

何人かは悲鳴を上げ、ほとんどの人が落ちていく。

俺は予めわかっていたので傾く床から離れていた。

フィーだけはワイヤーを袖から飛ばし、柱に巻き付け、ぶら下がっていた。……あれ下に落ちてたら見えるかな？

「あら？フィーは落ちないと思ったけどもう一人居たとは。えつと君は……」

「初めまして、リイン・シユバルツァーです。いきなりですがサラ教官の大人の魅力にやられてしまいました。オレと付き合ってくださいませんか？」

「おお。サラがプロポーズされてる。明日には世界滅亡かな」

「ちよつとフィー！せめて嵐とかにしなさいよ！まったく……ええつとリインだっけ？あなたの噂とかは気にしないけど、あたしダンディなおじ様がタイプなのよねえ」

「そうですか……。まああつてすぐ付き合えるとは思ってなかつたので大丈夫です。なら今度食事にでもいきませんか？」

「ん〜そこまで好かれるのは悪い気はしないけど、今はオリエンテーリングに参加して

もらえるとお姉さん嬉しいな♪」

「なるほど分かりました。すぐに終わらせてきますので」

「はいはい、がんばってね。ほらファイも行きなさい」

「んーめんどい」

「それじゃあファイ俺がお姫様抱っこついで運んでやろうか？」

「いい。イカ臭いのうつりそうだし」

「ファイ。俺も人間だから普通に傷付くぞ」

「ん。了解」

「はあ……。それじゃあサラ教官行つてきます。」

そう言つて、ファイとリインは落ちていった。

「はあ……。噂通りの女好きね。まあ悪い気はしないけど」

~~~~~

下に着くと、全員がこちらを向いた。

（ふむ……。ラウラもエマも良い体してるな。ホントこの世界の女性レベルが高すぎやしないか？まあそれで何か悪いってことはないが。むしろ良い、最高だ！……と、後はガイウスとユーシスにマキアスカ。ガイウスとは仲良くできそうだな。遊牧民の中には

一夫多妻の所もあるって言うしそこまで俺に偏見もないだろう。あとはツンデレとガリ勉かユースとマキアスは説明はいいでしょ」

その後、サラからオーブメントの説明などがあり、ユースとマキアスがまた言い合って先に行き、いつの間にかファイも先に行っていた。

「ふむ、仕方ない今いるこのメンバーでチームでも組むとしよう」

「そうですね」

ラウラの提案にエマが同意した。

「丁度男と女で三人ずつだ。それで別れるので大丈夫か？」

「女性だけで大丈夫か？俺としては女性に怪我をされると心苦しいんだが……」

ラウラ達の実力は知ってるが一応紳士ぶっておく。

「気遣いはありがたいがこれでも剣の道を歩く身、腕には自信はある。それにここは軍学校。男も女も関係ないであろう」

「そうだな。気分を悪くさせたらすまない」

「いや気にするな。それより自己紹介でもしておこう。ラウラ・S・アルゼイドだ。よろしく頼む」

「あ！私はエマ・ミルステインです。よろしくお願いします」

「アリサ・Rよ。そこの変態以外はよろしく」

「ははは…。僕はエリオット・クレイグ。よろしく」

「ガイウス・ウォーゼルだ。帝国に来て日が浅いがよろしく頼む」

「リイン・シュバルツアード。俺はみんなと仲良くしたいかな？よろしく」

それぞれ自己紹介も終わりラウラが声をかけた。

「リインか……。どこかで聞いた名だな」

「まあ貴族の間では有名だな。悪い意味で」

「種馬さんよ。た・ね・う・ま」

ラウラにアリサが教えた。

「たたたたた種馬!?!?!」

「そなたがああ……」

「ん？リインは馬でも育ててるのか？実は俺も古郷では……」

「ガイウス、アリサが言ってるのは……」

エマは赤面し、ラウラは興味深そうにし、ガイウスは見当違いなことを言い、エリオットがガイウスに説明していた。

「俺も見境無しって訳じゃない。大体ちゃんとお互い納得してるから問題はない」

「何が問題ないのよ！さっきだって私を……」

「な、何かあったんですか？！」

「つ／＼／＼／べ、べつに何も無いわよ!」

「ふむ? 節操がないのは感心しないがお互い納得してるのならよいのではないか?」

「俺のここでは違うが、他の遊牧民で一夫多妻の所もあるし、愛が多いことはいいことではないのか? 子供もその分産まれてくるだろうし」

「ま、まあ話もこのくらいにしてそろそろ行かない?」

「ふむ? そうだな。それではまた会おう」

「そ、それではお先に失礼します／＼」

「ふんっ!」

ラウラとエマとアリサは先に進んでいった。

「あはは……。災難だったねリン」

「まあこうなるとは思ってたさ。それより俺達も行こう」

「うん」

「ああ」

~~~~~

着々と進んでいるリン達一向。ここの魔獣はリンには物足りないものだったの

で、二人のサポートにまわることにした。

「ふう〜。リインって強かったんだね！とても楽に倒せたよ」

「そうだな。若いのにそれほどとは」

「そんな事ないよ、ガイウスの槍さばきもすごいし、エリオットも初めて使う武器をもうつかいこなしてるじゃないか」

「あはは、そんなことないよ」

「うむ。リインには負ける」

お互いに誉めあっていると、先の方で魔獣に囲まれているマキアスがいた。リインは直ぐ様向かい、太刀を構えた。

「マキアス！しゃがめ！」

マキアスはリインの言葉に慌ててしゃがむ。

「疾風っ!!」

リインは高速で移動しながらすべての魔獣を斬り捨てた。

「ふう……」

「す、すまない助かった」

「気にするな。困っていたらお互い様だ」

素晴らしいながらリインは手を貸し、マキアスを立たせた。

「いや、本当に助かった。僕はマキアス・リーグニッツだ改めてよろしく」

「ガイウス・ウオーゼルだ」

「エリオット・クレイグだよ」

「リイン・シュバルツアード」

「っ!? 君……貴族だったのか。しかも噂の種馬貴族」

「確かにそう言われてはいるが……」

「ちつ……。僕は君みたいな女性を人とも思わない奴が嫌いなんだ！ 助けてくれたのは感謝するが、あまり近づかないようにしてくれ！」

そう言うともキアスは速足に奥へ行ってしまった。

「ええつと……」

「気にするなエリオット。ああ言われても仕方ない。それより二人ともマキアスに着いていってあげてくれないか？ 俺は一人で大丈夫だから」

「さ、そう？ けど本当に大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「わかった。すまないが先に行く。リインも気を付けてくれ」

「ああ、また後でな」

ガイウスとエリオットはマキアスを追いかけていった。

(まあマキアスのことを考えたら、ああ言うのも仕方ないな。俺でもそう言う) マキアスに共感してリインは1人先に進んだ。

~~~~~

(ん?あれはフィーか?何をやっているんだ?)

フィーは天井の影でじっとしていた。

リインは後ろから静かにフィーに近づいていった。

「よっ、フィー。こんなところで何してんだ?」

「っ!!なんだイカの人か。すごいね。全然気が付かなかったよ」

「イ、イカの人は止めてもらえないか?俺の名前はリインって言うんだ。そっちで頼む」

「ん。了解リイン」

「で?何してたんだ?」

「ん。どのくらいできるのか見てた」

そう言うフィーが見る先を見ると、ラウラたちが魔獣と戦っていた。

「ふっん。どうだった?」

「そこそこ。じゃ私もう行くから」

そう言うとき、フィーは飛び降りて先に向かった。リインはその後を当たり前のように着いていった。

「……何でついてくるの？」

「ん？いやあフィーとあんま喋れてなかったし、それに仲良くなりたくないあつて」

「ごめん私好きな人いるから」

「違うわ！確かにそつちでもウエルカムだけど今のは普通に友達としてだよ！それにそんな嘘棒読みで言われても」

「嘘じゃない。私は彼を愛してる」

「へ、へえそうなんだ（マジかよ！原作でそんな情報なかったぞ！）」

「彼仕事熱心で何があつてもそこから動かないの」

「警備員か何かかな？仕事熱心なのはいいことだな」

「そう。雨の日も嵐の日も。嵐の日も」

「え!?!嵐でも!?!さすがに嵐の時は動こうよ!?!」

「いろんな人にのし掛かられたとしても」

「え!?!そんな酷いことを……可愛そうに」

「たまに私も乗ってる」

「君好きな人にそんなことしてるのか!?!フィーはSだったのか薄々気づいてたけど!！」

「今日もさつきその上で寝てた。」

「ん？……ってそれベンチやないかい!!ちよつとその人に同情しちやつたじゃないか!!」

「ちよつとうるさい。静かにして」

「なんてマイペースなんだ!!だが許そう。可愛いからな」

「ん。知ってる」

「ふふ、まさかファイがこんな男を手玉にとる小悪魔だったとは。だがそんなファイもまたいいな。さらに好きになったよ」

「ん。ありがとう」

「お前らはこんなところでなぜ漫才をしている」

ファイといちやいちゃしてたら、ユーシスが呆れながら話しかけてきた。

「ああ、ユーシスだったか?ただの友達同士のスキンシップだ」

「ぶい」

リインが答えるとファイはピースした。可愛い。

「はあ、もういい。一応名乗るがユーシス・アルバレアだ」

「…ファイ・クラウゼル」

「リイン・シユバルツアード」

「ほう？お前がああのシユバルツァー家の養子か。噂は聞いているぞ」

「絶世の美男子とか？ふっ、照れるな」

「種馬の方だ。まあ噂についてはとやかく言うつもりはない。その代わりあまり俺に関わらないでくれると助かる」

「ん？ああ、分かった。安心しろ。俺に男色の気はない」

「そういう意味ではない!!……はあ、もういい先に行かせてもらおうぞ」

「そう言い残してユーシスは歩いていったので、ラインとフィーも着いていった。

「……なぜお前らも来る」

「いやいや、もうすぐ着きそうだし一緒に行った方がはやいだろう？」

「はあ……。勝手にしろ」

三人は奥へと向かった。

~~~~~

「グオオオオオオオオオ!!!」

「っ！この声は…、二人とも行くぞっ！」

「わかった」

「了解」

三人急ぎ、先程の声のもとへ走った。

奥の部屋に入ると既に戦闘は始まっていて、魔物の尻尾が今にもアリサに当たりそうになっていった。

「っ!!危ない!!」

リインは一瞬のうちにアリサの元に着き、尻尾を太刀で跳ね返した。

「大丈夫かアリサ!？」

「!!え、えええ!」

そう言ううとアリサは直ぐに下がって体制を整えた。

「みんな!とりあえず体制を整えろ!整い次第エマ、エリオット、ユース、アリサはアーツの準備!マキアスとガイウスとフィーで敵を錯乱!俺とラウラでアーツ発動後にとどめで行くぞ!」

「了解!」

四人がアーツを準備する中、マキアスは遠距離で銃、ガイウスは近距離で敵の攻撃を避け、フィーは動き回りながら銃剣を撃ちながら応戦していた。途中、VII組全員が淡く

光っていた。

「アーツ行くわよっ!!」

アリスの合図で四人のアーツが放たれ、当たったと同時にリインは足を切り落とした。

「今だラウラー!」

「承知!」

ラウラ飛び上がり、魔獣の首を切り落とした。
すると魔獣は塵となり消えていった。

見事魔獣を倒したあと、サラが来てⅦ組設立の目的、ARCUSの機能の話の後、嫌なら他のクラスに移動できるけどどうする? っていう話になった。皆が戸惑うなかリインは真剣な表情をしながら一歩前に出た。

「リイン・シユバルツァー。参加させてもらいます」

「一番乗りは君か。何か事情でもあるみたいね」

「ええ。俺にとつてはとても重要な……」

リインがそう言うのと、少し空気が重くなつた感じがした。

「……聞いても良いかしら?」

「ええ……。俺はここに、ハーレムに入れる妻達を探しにきたんです」
「「「「「「「……は？」」」」」」」」

「俺は今まで沢山の女性と交わって来ましたが、そこには愛情なんてない。お互いの性欲を満たすだけのただの行為でしかなかった。……だけど、俺はそんなものより、お互いに愛し、愛を確かめあうような、そんなこつ!!痛い!?何をするんですか教官!?!」

力説していたらリインはサラに頭を叩かれた。

「真面目に聞いて損した。はいはくい。他の子はどうする〜?」

「くつ、なぜだ?なぜ俺のこの熱い想いが分からない!?!」

「いや、リイン。さすがにあれはないよ……」

リインはエリオットに呆れられていた。

なんだかんだで全員Ⅶ組所属となり、オリエンテーリングは終了した。

2話：クロスベル創立記念祭①

オリエンテーリングが終わって数日たった。今日は生徒会の手伝いやら旧校舎の調査を終え、実室で情報誌を読んでいた。

（へえ、そうなんだ。お？アルカンシエル特集やってんじやん。やつぱイリアとリーシャエロい体してんなあ）

パラパラとめくっていると一つの写真が目に入った。

（ん？おお！特務支援課じやん！エリイさん可愛いなあ。テイオすけも、うん。この無表情が逆に良いね。ランディはランディだし。そしてロイドばいせんっ!!恐ろしい、なんなんだこのベビーフェイスは！この顔で数々の女性を落としたりしたんだろうな。しかも無自覚で！くそっ！なんて積み作りなやつなんだ！おい警察！何をしている！身内に天然ジゴロが紛れ込んでるぞ！さっさと捕まえろ！）

そんな下らないこと考えてると、ふとあることに気がついた。

（さてよ？今の時期、確かクロスベル創立記念祭だよな……。ということは今クロスベルエステルとヨシユアがいて……）

「あああああああ!!」

リインはあることを思いだし、思わず大声を出してしまった。

(そ、そうだ。今クロスベルには……!こやしちやいられないっ!)

リイン急いで部屋を飛び出し、サラの部屋に向かった。

「教官!サラ教官!開けてください!はやく!」

リインは扉を叩きながら声をかけた。

「ちよつと、うるさいわねえ?なに?夜這い?悪いけど、まだ私を抱くには好感度が足りないかなあ〜♪」

「そんなの今はどうでも良いんです!」

「そ、そんな事ってあん「今は話を聞いてください!」……たく、しょうがないわねえ。とりあえずなかに入りなさい」

サラはリインの態度に若干イラつきながらも、リインを部屋に招いた。

「で、話ってなに?」

「教官明日から8日間の休暇届をお願いしたいんですが」

「休暇届?なんで?」

「クロスベルに行きたいんです」

「クロスベル?行ってなにを……もしかして、クロスベル創立記念祭があるから遊びたいとかじゃないでしょうね?」

「それは違います教官!!……今クロスベルに、俺にとって大事な人がいて、その人が辛い思いをしているんです。だから、だから俺はその人を助けに行きたいんです!」

リイン真剣な表情でサラに伝えた。

「……女の子を漁りに行くんじゃないのね?」

「それでもできたらしいですが……そっちはおまけです。できなくてもいいです。」

「結局それもあるのね……はあ、しょうがないわね。何とかしてあげるわ」

「!!きよ、教官!ありがとうございます!愛してる!マジ感謝!」

リインは感極まってサラに抱きついた。

「つ／＼／ちよ、ちよつとリイン!そういうのはまだ好感度足りないって言ったでしょ!!」

サラは顔を赤くさせ、リイン投げ飛ばし、扉にぶつかりそのまま廊下に投げ出された。「ぐはあつ!!……と、とりあえず本当にありがとうございます!今日は明日のためにもう寝ますね!お休みなさい!」

そう言い残し、リインは自室に走った。

「はあくまったく。少しドキツとしたじゃない……」

そして翌朝。リイン朝一でクロスベルに向かうため早起きし、そのままトリスタ駅に向かいクロスベル行き列車に乗った。

(ふっ。まさかこの俺が好きキャラbest3に入る子のことを忘れるとは……危うく切腹ものだったぜ。さくて待つてろよ。my ideal little sister、レインちゃん♪)

なにを隠そう俺はレンちゃんが三本の指に入るほど好きなんだ！え？他の二人はつて？それはまた今度な！今はレンちゃんだ！え？今度はなんだ？エリゼはどうしたつて？エリゼとはもうやつてんだから妹なんて呼べねえだらうが!! (衝撃の事実) それでレ……うるさいな！なんだよ!! レンちゃんは12歳なのに手を出すのかつて？ばっかやろう!! レンちゃんをそんな性的な目で見るな!! 俺はただ純粹にレンちゃんのお兄ちゃんに、家族になりたいんだ……。おい、いま気持ち悪いと思ったやつ出てこいや！お前の股間にSクラぶちかますぞごらあ!! みんな覚えてるか？子の台詞を……

『エステルもヨシユアも二人とも大ツキライ……でも……でも同じくらい大好き……っ！』
俺も大好きだよおおおおおおお!!!

なんて思ったもんですよ。

て、ことでクロスベルについたみたいなんで妹でも探しに行きますか……

『このクロスベルで、妹を助けるため命を懸け、1人の家族を想う兄の愛と愛と愛の戦いが今始まるっ!!』

~~~~~

……わけがないです、はい。

だいたい別にレンちゃんそんな危ない目に会わないしね。せめてコリンが魔獣に囲まれるくらいでしょ？あ、よく考えたら結構危ないか。

それよりもですね……レンちゃんどこにいんのよ!?確実に分かるの祭の三日目からだから……。

しょうがない。まずは外堀を埋めるか。

所かわってはい来ました！遊撃士協会クロスベル支部！

クロスベル支部はなかなかすごいんですよ、奥さん！

クロスベル支部ほかには優秀な遊撃士が集まって、中でも風のぶふっ!!…すいません風と聞くとなんか笑っちゃうんですよね。何ででしょうね？そんなことより風の剣聖って呼ばれているアリオスさんはS級昇格を打診されるほどすごい人なんです。ちなみにアリオスさんも八葉一刀流免許皆伝者です！八葉すごい！さあ！そんなアリ

オスさんよりすごい人がこのクロスベル支部にいるんです！それは……

「エオリアさんっでっすっ!!!」

声を上げながらリインは扉を開けた。

「いやいやリンさんの方が可愛いだろって人の気持ちも分かりますよ？俺の中でもリンさん上位に入るもん！けど俺はエオリアさんを押すね!!その下につけてるの！後ろだけ長くして！前も長くしろよ！わかってる、わかってるよ？機動性云々だろ？それはわかってるんだよ!!けどその前から見える太腿から目が離せないんだよ!!可愛いもの好きらしいけどあんた可愛いですね!?俺も可愛いもの好きなんで持ち帰っていいですか!?だめ？すいません!!というわけでこのクロスベル支部で一番すごいエオリアさんだと思んですけどそのところミシエルさんはどう思います!？」

一通りエオリアさんのことを語り、ミシエルさんの意見を聞いてみた。

「……とりあえず仕事の邪魔だからそこどきな」

「あ、はい」

~~~~~

「……で、君、何かよう?」

「エオリアさんをみ……すいません！嘘です！だからそんな睨まないで！ミシエルさん

敵つい顔してるんだからー！」

「余計なお世話よ！で、本当は何しに来たの？」

「ちよつと会いたい遊撃士がいます……」

「またエオリアとか言うんじゃないんでしようね？」

「いや、確かに会えたら会いたいですけど、今回はアリオスさんとエステルさんとヨシユアさんに……」

「あらうちのエース達に何のようなの？」

「ああ、アリオスさんは同じ流派なんで一度会つところかなうって、他の二人は……まあ噂の遊撃士なんでどんな人だろうって（外堀埋めたいからとか言えんしな……）」

ラインの言葉にミシエルは驚いた。

「あら、アリオスと同じってことは八葉一刀流なの？あなた」

「はい。一応免許皆伝もしてます……」

「!!す、すごいわね。その若さで」

八葉一刀流の免許皆伝ともなれば剣聖と呼べる実力があるのは確かだ。それをこのまだ若い少年が至っているとはとミシエルは心のなかで称賛していた。

「それで今います？三人のだけか」

「残念だけど今はみんないないわね。あなたの好きなエオリアもリンと依頼で出てる

わ」

「くっ！最悪アリオスさんはどうでもいいが、エオリアさんには会いたいっ！」

「そ、そう（なんだかアリオスがかわいそうね…）」

「…しようがない。少し他の所回ってきます。クロスベルに来てまだここにしか来て
ないですから」

「あらそう？じゃまたね」

「はい、それでは」

リインはミシエルに頭を下げ、協会を後にした。

~~~~~

（さて、どうしよっかな？支援課かアルカンシエルにでも行こうかな？あ！交換屋……  
は無いな。いくら俺でもあの人たちを落とせる気がしない。ミラを消費するだけにな  
りそう。…やっぱ支援課にいかうかな？エリイさん見たいし♪あれ？そういえばこの  
世界だとパイセンの女性関係どうなってる……。誰か一人のルート走ってるのか、  
ハーレム糞野郎なのか……。気になるな。場合によっては私頑張らせていただきます  
！はい！）

そうと決まればと、リインは意気揚々と支援課に向かった。

~~~~~

「こんにちは〜！」

元氣よく挨拶しながら、リインは支援課のビルに入った。

「あれ？支援課も誰もいないのか……。さすが魔都、いろいろな仕事があるんだな」

「ウォーン！」

「ん？」

一人魔都の恐ろしさを理解していると何かの鳴き声が聞こえ振り返ると、白い大きな狼がいた。

「なん…だと…」

（いや知ってますけどね。神狼ツアイトさん。ここは犬だと思っておくか……）

「おお！大きいお犬様だな。支援課の皆さんはお仕事かい？」

「ウォーン！」

「なるほど。なるほど。ロイドさんは女漁りに、エリイさんは買い物に、テイオすけはエリイさんの付き添い、ラニキはロイドさんに女を寝取られやけ酒と。支援課の男性陣酷いですねえ。これはリーダー代えた方が良いのではないですか？」

「ウォーン！ウォーン！」

「おお！やはり貴方もそう思いますか！」

いや、全然なにいってるかわかりませんよ？けど会話とは言葉でやるんじゃない！熱い魂で相手と語り合うんだ!!

「ということは仕事の方もあまりうまくいってないんじゃないですか？」

「ウオン！ウオンウオン！」

「な、なんと！エリイさんに手を出しておきながらフランさんにイリアさん、リーシャさんにええ!? テイオすけまで!? これは捜査一課に「君はなにを言ってるんだ!?」……ん?」
後ろを見ると焦った表情のロイドさん、顔を真っ赤にしたエリイさん、大笑いしているラニキ、ジト目のテイオすけがいた。

「これは支援課の皆さん。すいません勝手に邪魔してしまつて。今話題急上昇中の特務支援課とはどんな人達かと思つて来たのですが、生憎お犬様しかいなかったのので少しお話しさせてもらつてました。けれど皆さんとてもお忙しいご様子。また日をあらためるとしましょう。では、さよ「いやいや、そんなので逃げれる大間違いだよ!」……くそつ！さすが支援課！俺の話術が通用しないとは！」

「はは…、一先ず座つて話さねえか？まず自己紹介でもしてさ」

「さ、さすがラニキ！氣遣いできるいい男！なのにつ！なのに、なんで女の氣配がない！っは！そうか！ロイドさんか！くそう！ロイドさん！どこまで節操がないんだ!!」

「え!?俺!?人の彼女を取ったりなんかしないよ!?」

「ということは……すいません。ランディさんあんま近寄らないでもらえますか?」

「俺は男色家でもねえよ!」

いや〜楽しいな支援課♪いじりがあるわあ♪え?男性陣嫌いなのかって?いやいや!好きだよ二人とも。あ、likeの方ね?なんか主人公勢見たらテンション上がっただけだから。

~~~~~

「……と、それじゃ、そろそろ落ち着いて話しましょうか。あ、席順どうします?俺エリイさんとテイオちゃんの間がいいんですけど大丈夫ですか?ありがとうございます!」

「いやいや!まだなにもいってないよ!」

返事を聞かず、そのまま先に座っていたエリイさんの隣に座った。

「さあテイオちゃん俺の隣空いてるよ?」

「遠慮させてもらいます」

テイオはそう言うのとロイドの隣に座った。

「なるほど……。ロイドさんはテイオちゃんルートなんですね。了解です。」

「何の話だい!!? ……んんっ! とりあえず自己紹介でもしようか。俺はロイド・バニングス」

「エリイ・マクダエルよ。よろしくね」

「ランディ・オルランドだ。よろしくな坊主」

「テイオ・プラトーです」

「リイン・シユバルツアーです。よろしくお願いします」

「よろしくリイン君。それで君はここになにしに来たんだい?」

「ああ、呼び捨てでいいですよ。観光と数名会いたい人に会うのと嫁さん探しです」

「観光と人に会いに来たのは分かるが…結婚相手を探してるのか?」

「ええ。実は俺男爵家の息子、まあ養子ですけど子供なんですよ。男爵でも一応貴族なんで何人妻をとつてもいいんですが…政略結婚とか愛のない結婚は僕は嫌なんでね。こうして日頃から嫁さん探ししてるんです。あ、後でロイドさんに相談したいことあるんでよろしくお願いします」

「あ、ああ。俺なんかで役に立つなら…。それで会いたい人には会えたのかい?」

「いえ、今仕事中でいないらしいので明日また行こうかと思ってます」

「そうか。ちなみに誰か聞いてもいいかい?」

「ええ、大丈夫ですよ。全員遊撃士なんですけどアリオスさん、エステルさん、ヨシユア



エリイは顔を真っ赤にして驚いた。

「俺、祭の次の日までいるんでよかったら食事にも行きませんか？もちろん二人で」

リインの言葉にランディは口笛を吹き、エリイは頬を染め、何故かロイドとティオはエリイより顔を赤くしていた。

「せ、せつかくだけど祭の日は急いだろうし…」

「いいじゃねえかお嬢。そんなずつと仕事が入ってる訳じゃないんだし。なんだったら一日くらい俺達だけでまわすぜ？なあロイド？」

「あ、ああそうだな。一日くらいならなんとかなる。せつかく誘ってもらってるんだしいったらどうだ？」

「そこまでしてもらうなら……いこ……かな？」

「本当ですか！ありがとうございます！（そういえば2日目以降はエステルさん達やレンちゃん関係で忙しいな……なら）エリイさん。でしたら1日目はどうですか？確か2日目くらいにエステルさん達いるって聞いた気がするんで」

「1日目？大丈夫だとは思うけど後で調べて伝えるね？」

「わかりました。あ！よかったらオーブメントの番号教えてもらってもいいですか？」

「ええ、大丈夫よ。あら？私達のと少し違うけど繋がるのかしら？」

「大丈夫です。リインさんの家は開発に協力したのでそこはおさえてます。」

エリイの疑問にティオが答えた。

「へえ、なら安心ね」

そう言い、エリイとリインは番号を交換した。

「そういえばリイン君今日どこに泊まるの？」

「あくそういえばまだ決めてなかったです」

「ならここに泊まってけよ。ソファアで寝ることになるが金かからないから学生にはいいだろ。毛布とかは貸してやれるし」

「本当ですか？助かります」

「おう！なんならお嬢の部屋に泊まってもいいいぜ？」

「わかりました。そうします」

「私がよくない！」

こんな感じでクロスベルの初日を終えた。



### 3話：クロスベル創立記念祭②

朝の日差し、小鳥のさえずりが聞こえ、俺は目を覚ました。

「これが、朝チユン……なわけないです」

どうもリインです。朝チユン？んなわけねえだろ。普通にソファで寝てましたよ。まあ、今俺の心はとても穏やかなんでいいんですよ。何故かって？ロイドさんがティオルートってわかったからですよ！いやあ、昨日疲れた。なかなかわからねえんだから天然ジゴロベビーフェイス。最終的に冤罪で捕まるか正直に言うか選ばせました。いや、いい仕事した。罪悪感なんてこれっぽっちもない。だって今一つのラブロマンスが始まったんだからね。あ、俺とエリイで二つだねテヘペロツ♪……そろそろ気持ち悪いから普通にしますか。

まあまだ油断はできない。碧に入ったとたん他の所いくかもしれないしな。要監視だな。

「よし。とりあえずエリイの部屋行こつと」

~~~~~

はい来ました。エリイさんの部屋の前です。別に変なこと考えてませんよ？ちよつとエリイさんの寝顔がみたいいななんて思つてませんよ？ホントだよ？

よし、じゃあ行きますか！

(お邪魔します)

静かに扉を開けて入り、そつと閉める。そして音を立てないように静かに進み、そしてベッドの上^にいたのは……

(Yシャツのみ……だと……)

おいおいおいおい!!^{!!}と言うことだスタッフ!! Yシャツ姿抱き枕カバーと同じじゃないか!!^{!!}あれは気持ち悪いきも豚スタッフが考えた妄想の産物じゃなかったのか!! マジかよ! ただの神スタッフじゃねえか!?

!!
くそう! なんだあの太腿は! ただでさえ高いエリイさんのエロ力^{パワー}が上がつてやがる

リイン①『きゅ…900000…?! 1000000…1100000…バ…バカな…まさか…ま…まだ上昇している…!』

じゅ…1200000…1300000…1400000…ま…ま…まだあがつていく…!!^{!!}そ…そんな…1600000』

リイン②『…こんなことが…こんなことが!!』

ライン①『180000?!』 し…信じられん…こ…これがエリイのし…真の力なのか…?』

……ていう、茶番が思わずでちまうくらいすげえぜこりやあ。

(ふっ…。俺の負けだよエリイ。今日は大人しく、二度寝でもしておくよ…)

勝手に負けをとめたラインはエリイの布団に潜り込んだ。

~~~~~

「ん、ん…。うん?ん…つ…はあ。」

窓からさす日差しでエリイは目を覚ました

「うくん…まだ眠いなあ…。起きて顔でも…あれ?」

眠気覚ましに顔でも洗いに行こうとしたエリイだが、何かが腹部を固定していて動けない。

「な、なにかしら?妙に膨らんでるし…」

不思議に思いながら布団をどけると…

「すう…すう…すう…」

エリイに抱きつきながら寝ているラインがいた。

「い…い…い…いやあああああ!!」

「ぐえふっ!!」

エリイは叫びながらリインに平手打ちをお見舞いした。

~~~~~

「……………」

「……くつ。ふふ……。つあはっはっは。なんだありイン。その頬の赤いのはあ」

食卓には、頬に赤い紅葉マークをつけたリインと支援課四人が囲んでいた。

「……ちよつと朝はやく起きてしまったんでエリイさん起こすついでに寝顔でも見ようかなあつていう思つてエリイさんの部屋いったら、思つたよりエロい格好して寝ていたの
で思わずエリイさんのベッドで二度寝を」

「そりやまた面白いことしたなあ。それにしてもエロい格好つてどんなんだつたんだ?」

「それは「ちよつとリイン君!言わないでよ!」……言いませんよ。あの格好を知ってるのは俺だけでいいんです」

「そ、それはそれで困るんだけど……」

「はは……。仲がよさそうでよかつたよ」

「う、羨ましい。私もロイドさんと……」

「ん?どうしたティオ?」

「っ！いい、いえ！なんでもないです！」

「？そうか」

（おいおいこの距離で聞こえないとかありかよ。さすがパイセン。えげつねえぜ……）

ロイドの難聴にリインが驚愕していると、エリイが声をかけてきた。

「リイン君、今日は何か用事あるの？」

「今日ですか？今日は遊撃士協会寄ったあと適当にぶらぶらしようかなあと。あ、アルカンシエルには行ってみたいなあって思ってます」

「アルカンシエルかあ。けど今から行っても席ないと思うわよ？」

「あ、そうなんですか？まあその時はその時ですね。イリアさんとリーシャさんに会いたかったんですか……」

「おいおいリイン。お嬢落とした次はアルカンシエルの二大スターか？これだからイケメンは」

「いやいやランデイさんもかつこいいじやないですか。それに俺は好きになった人が俺を好きになつてくれたなら何人でもいいですよ。あ！安心してくださいエリイさん。俺、ちゃんとエリイさんのこともしっかり愛しますから」

「だ、誰もそんなこと聞いてないでしょ!?!それにランデイ!!私落ちてなんかないわよ!?!」

「いやいや時間の問題だろ。なあロイド、テイオすけ?」

「まあ……」

「そうですね」

「く／＼／もうつ！」

（なんだこれ、支援課居心地よすぎかよ。うわあ。俺、帝国に戻るかなあ…）
あまりの居心地のよさに、少し心配になるリインであった。

~~~~~

朝食を終えたリインは、支援課四人と分かれ、遊撃士協会に向かった。

「おはようございませう」

挨拶しながらリインは扉を開けた。

「おはようございませう、ミシエルさん！今日はだ…れ……」

リインは何か言い切る前にその場で固まった。

その先には……

「あれ？お客さん？何か依頼かな？」

「はい。はじめましてリイン・シュバルツアアです。貴方に依頼しに来ました」

「ん？指名依頼？珍しい。何々？」

「俺と付き合ってください」

「へ？」

「実は前からエオリアさんのことは気になっていたんです」

「あ、ありがとうございます」

「そして今日、目の前で直接見て確信しました。好きです。付き合ってください」

「ええつと…今あつたばかりだし…」

「大丈夫です。さすがにあつてすぐ付き合ってもらえるとは思ってないです。ではお互いのことを知るためにお食事にも行きませんか？」

「ん…まあ食事くらいならあ…」

「ありがとうございます！なら今日の夜はお仕事ありますか？」

「いや、夜はないけど」

「なら大丈夫ですね！夜に迎えに来ますんでここで待つてください！それでは！」

言うだけ言うと、リインは出ていった。

「あ、あれ!? 私いつの間にか食事に行くことになってる!？」

「す、すごいわねあの子…」

「手慣れてるわね……」

~~~~~

エオリアとの食事の約束をしたリインは、アルカンシエルに向かっていた。

（今日はいい日だなく。まさか朝からエオリアさんにも会えたし、食事にも誘えたし。ふっふっふ、食事にさえ誘えてしまえばこっちのもんよ）

ゲスいことを考えながら歩いていると、目的の場所が見えてきた。

（あれがアルカンシエルか。金ぴかすぎだろ。金ぴかでも全然下品じゃねえな。むしろ綺麗だ）

アルカンシエルに感嘆しながら、リインはアルカンシエルに入っただけだった。

アルカンシエルに入ったリインは、受付にまず向かった。

「すいません。イリア・プラティエさんにお会いしたいのですが」

「失礼ですがお名前とご関係の方をお伺いしてよろしいでしょうか？」

「リイン・シュバルツアアです。関係は…イリアさんの友達弟の友達？」

「はあ…リイン様、ですね？一応本人に大丈夫か聞いて参ります」

そう言うのと受付の人は奥に下がって行った。

「イリアさんがお会いになるそうです。ご案内致します」

受付の人が戻り、リインをつれてイリアのもとへ案内をした。そしてある部屋の前に

つき、受付の人は扉をノックした。

「イリアさん。リイン様をお連れしました」

「ありがと。入っていいわよ」

「どうぞ」

そう言うのと受付の人は戻って言ったのでリインは入室した。

「失礼します。どうもはじめましてイリアさん」

「よろしく。それで弟君のお友達のリイン君は何しに来たの？」

「いやあ、クロスベルの有名な美人二人を一目でも見たいと思っただんですが、写真で見るとよりも綺麗でビックリしました」

「あら、ありがと♪君も弟君には負けるけど可愛い顔してるわよ?」

「はは、俺はロイドさんと違って可愛さでは売ってないんで。数年もすれば可愛さも抜けてこのイケメンフェイスに磨きがかかっていると違いますよ」

「ふふ、面白いわね君。確かにすごいイケメンになりそうね」

「イリアさんはどんな男がタイプです?」

「私? うゝん、悪いけどリイン君よりは弟君の方がいいかな? いじってて面白いし」

「はは、そうですね。さすがロイドさん。俺にはない引出しを上手く使ってるな、あれで

無自覚とか絶対泣いた女性は少なくない筈ですよ」

「確かにね。セシルにもそんな話何回か聞いたことあるわ」

「成る程やはりか……。やっぱり捜査一課に頼むか？」

「あはは！本当面白いわねリイン君！恋人は無理だけどお友達にだったら凄くなりたいわ」

「お、そうです？それじゃあお友達でお願いします。いつでも恋人にチェンジできますんで」

「ふふ、今はないかなあ？この仕事に集中したいし、私よりセシルなのよね……」

イリアは少し悲しそうな顔をした。

「セシルさん、ですか？」

「そう。弟君の姉でね？私の親友なんだけど昔ちよつとね……」

（セシルさんか……。確か今もガイさんのことが好きなんだよなあ。いくら俺でも他に好きな人がいるならあんま出したくないなあ。……まあ今は様子見、か）

「うくん……。あ！リイン君明日暇？」

「明日ですか？夜までなら、暇ですけど」

「なら明日セシルと弟君がアルカンシエル見に来るから貴方もどう？」

「いやあ、姉弟水入らずを邪魔するのなんですし遠慮しときます」

「そう?…まあそれもそうね。まあそれもそうね。」

「ええ、それよりリーシャさんは今日いないんですか?」

「明日から記念祭で忙しいから今日はアルカンシエル休みなの」

「そうなんですか。リーシャさんにも会いたかったですね」

「リーシャ可愛いものね。あの娘の胸……」

「え?そうなん……」

それから時間までリーシャの話で盛り上がる二人だった。

~~~~~

「あ、そうだイリアさん。……の……れませんか?コネとかで」

「え?できると思うけど、どうして?」

「それは……」

~~~~~

日も暮れてきたので、アルカンシエルを後にしたリインは遊撃士協会に向かった。

「お待たせしましたエオリアさん!さあ行きましようか」

協会に入つてすぐ、リインはエオリアに声をかけた。

「ふくん？けどリイン君お金大丈夫？学生さんなんでしょ？私が出してもいいけど…」
「いやいや！女性に払わせるなんてありえないですよ！エオリアさんの分も俺が払いますよ。これでもそれなりに稼いでるんで」

リインはユン老師との修行の時倒した魔獣のセピスでお金を稼いでいた。それなりに強い魔獣を倒してきたのでセピスも普通より多く落とした。

「いやいや私の分までは悪いよお〜」

「俺から誘ったんですからこれぐらい普通ですよ。まあここは俺の顔をたてると思って払わしてくださいよ」

「そう？ありがとね、リイン君」

「いえいえ。あ、そうだ！ここのお酒、他じゃ飲めないような美味しいのがいくつあるらしいですよ〜」

「そうなの？飲もつかなあ〜？あ、けどリイン君飲めないのに私だけ飲むつてのも…」

「俺のことは気にしないでいいですよ。せっかくの美味しい食事なんですからお酒もあつた方がいいですから」

「そうそれじゃあ…」

そう言うとエオリアは次々に注文した。

~~~~~

「ふう…。ホントにおいしかったあ。ありがとね？リイン君」

「いえ、こちらこそエオリアと一緒にいれて楽しかったです。それより大丈夫ですか？」

「うん…。凄く美味しかったから少し飲み過ぎたかもお」

「なら少し休憩しましょう。俺今日このまま泊まるつもりだったんで部屋取ってるんです」

「ええ？悪いよお」

「いや、このまま帰す方が悪いですよ」

「じゃあお言葉に甘えてえ」

「はい。(つしやあ！ちよろい！ちよろすぎるぜエオリアさん！このまま朝まで、ふっふっふ……)」

リインはニヤニヤするのを我慢しながら取った部屋に向かった。横から獲物狙う獣の目で見られているとも知らずに……

## 4話：クロスベル創立記念祭③

酔っ払ったエオリアをつれたリインは、取っていた部屋に着き、エオリアをベッドに寝かせ、自分はベッドの端に腰掛けた。

（意外とすんなり事が運んだな…。さて、後はやることやるだけ。あ、やべ。興奮してきた。落ち着けマイサン。お前の出番はもうすぐだ）

リインはこれからの事を考えると下半身の自己主張をおえなかつた。そんな事考え  
てると。

「ねえリイン君」

「はい？なん…んむう！」

後ろからエオリアに呼ばれ振りかえろうとしたら、いきなりキスをされ、ベッドの上に引き込まれて馬乗りにされた。

「ん…ぶはあつ…どうしたんですかエオリアさん…」

エオリアからキスされたのは嬉しいが、リインはいきなりで驚きを隠せない。

「はあ…はあ…いきなりって最初からこうするつもりだったくせに、リイン君」

「確かにそうですけど…いつから気づいてました？」

「私のこと好きなのは分かってたけど今日やろうとしてるの気づいたのはレストラン入ったときかな？あそこお酒で有名なの知ってたし」

「そうですか……ここまで来たつてことはやるのはいいつてことでしょうけど、それは今日だけですか？」

「リイン君はどうなの？」

「俺は最終的には奥さんになつてもらいたいです。俺帝国の男爵家なんで他にも奥さん作りますけど」

「そうなんだ……私はいいよ？リイン君の奥さんになつても。今日あつたばかりだけど意外と男らしいし顔もタイプ。ちよつと可愛いしね♪」

「嬉しいです。エオリアさん見たいな綺麗な人が俺のになつてくれるなんて」

そう言うつとリインはエオリアに軽く首筋にキスをした。

「ん……。聞きたいんだけど、他に奥さんに決まつてるの何人いるの？」

「今のところエオリアさんの他は一人ですね」

エオリアの質問にリインはおっぱいの輪郭をなぞるように撫で、そのまま軽く揉むように動かす。

「あんつ……そうなんだ。…ねえ、結婚とかはまだでもいい？私今遊撃士が楽しいの、リンもいるし。」



「ああ、いいですよ。まだシユバルツァー家継ぐ訳じゃないですし」  
「ごめんね」

「大丈夫ですよ。さて、そろそろしまししょうか…」

「うん……んちゅう」

そう言うとりインとエオリアは互いに抱き締めあい、キスをした。

~~~~~

高級感溢れる天井に違和感を覚えた。

最初は目が覚めたばかりでまだ頭がはつきりしなかったが、しばらくすると昨夜のことを思い出した。

(成る程、エオリアはされるよりするほうが好み、と)

昨夜のエオリアの様子から俺はそう結論付けた。あ、ちなみにタメ口で話すことにしました。なんかエオリアに丁寧語とかで話すのバカらしくなったんで。それよりエオリアだよ。詳しくは言えないが俺のアレをエオリアがアレするときの顔が非常にエロかった。しかも途中で止めてくるんだ。直接表現するのは大人の事情で避けるが例えるなら風船が割れるのが俺のアレがアレになることだとすると、奴は割れるギリギリで空気を入れるのをやめるんだ！俺がはやく割って欲しくて嘆願してもニヤニヤしてや

がるんだ！エオリア曰く我慢できなくなり必死にお願いするのが可愛いらしい。くそう!!なんか思い出したらイライラしてきた!こうなったら今から二回戦を……ってあれ?エオリアいないし。ん?なんか下のほうが動い———【二回戦中……】———

「しくしく……。いいようにもてあそばれた。もう僕お家帰る」

なんなんだよこの人!!僕こんなの知らない!ビクンツビクンツ／＼って感じだよ!

「凄いなエオリア……。遊撃士より才能あるんじゃない?」

「え?なにそれ全然嬉しくないんだけど!」

「だろうな」

そう言うのとエオリアは頬を膨らました。可愛い。

「むう、もしかしてからかっている?またいじめてあげてもいいんだよ?」

「はっ!今のうちに吠えるだけ吠えとけ。そのうちそんな事言えなくなるからな」

そんな元気なくなるまで弄ればいいんだろ?何処かは言わんが。やらる前にやればいいはなした。

「それよりはやく着替えて働け遊撃士」

「は〜い。あ、これ私のエニグマの番号ね」

そう言つて紙を渡してきた。用意がいいな…。

「ふふつ、ロイドさんは普段とあんまり変わりませぬね？」

「あー、普段から行動しやすい服を着ちやつてるからね。二人は、姉妹でデートかい？」

「えへへ、そうなんです」

フランは嬉しそうにノエルの腕に抱き付いた。

「はあ、本当だったら妹なんかとじゃなくって彼氏と回りたいですけど……。そんなの作る暇もないしなあ」

「なら俺なんかどうです？お姉さん」

~~~~~

「なら俺なんかどうです？お姉さん」

俺はノエルさんとフランちゃんの後ろから声をかけると、三人とも驚いた顔をした。

「り、リイン。びっくりした、いつからいたんだ」

「よおねえちゃん、かわいいねえ。俺と遊ばねえか？まあいつ帰れるかはわからねえかな？げへっへっ」のあたりからです」

「いや、そんなこと言つてないから！」

「あれ？そうですか？ああすいません。遠くから見たらロイドさんがナンパしてるよう

に見えたんで、てつきりいつもの調子で言ってるであろうと勘違いしました」

「ほええ。ロイドさんそうだったんですか」

「いやいやフラン！誤解だ！」

「二人とも離れましょう。あの人、人畜無害そうな顔してあつちの方は節操がないんだから」

「はわわわ。節操無しなんですわね」

「ろ、ロイドさん!!そんな人だったなんて幻滅です!!」

「ま、待ってくれ二人とも!?!誤解なんだ!!」

「すごい。なんか浮気がばれたカップルみたい」

「リイイイイン!!」

~~~~~

「いや、面白いですねロイドさん」

「俺は全く楽しくない。はあ、イリアさんがかわいくみえる」

「イリアさんは可愛いじゃなくて綺麗ですよ」

「確かにそうだが、そういうことじゃないんだよ……」

「す、すいませんロイドさん。誤解してしまつて……」

「そくだよお姉ちゃん。あんなの嘘だつてすぐわかるよ」

「ん、フランちゃんつて意外とすごい娘だったんだね」

「意外つてなんですか」

フランちゃんはそう言つて肩パンしてきた。結構痛いな。

「ところで三人はこの後どうするつもりなんです？」

「私とお姉ちゃんはお洋服とか見ようとしてました」

「じゃあ四人でいきましようよ。今なら超絶イケメンの俺と、天然ジゴロのロイドさんの意見が無料で聞けますよ？ロイドさん、いいですよね？どうせ暇でしょうし」

「確かに暇だが……。リイン。君、俺のことバカにしてるだろ？」

「そんなことないです。どちらかと言うと尊敬してますよ俺」

「そうは見えないんだが……」

「まあまあ。それでどうです？」

「私はいいですよ。お姉ちゃんは？」

「フランがいいんだつたら私も構わないですけど……」

「じゃあ行きましよう！さあ、はやくはやく！」

その後普通にノエルさんとフランちゃんが着たのを俺とロイドさんがコメントしたり、カフェで休憩したりして解散した。え？ノエルとフランを落とさないのかつて？い

やくしたいのは山々なんだがフランちゃん、なんかやばそうなんだよな……俺の直感が告げてんだよな、深追いすんなって。俺の感外れたことないから、マジで。ノエルさんはフランちゃんも付いてきそうだからね。今は様子見します。怖いもんフランちゃん。

~~~~~

今日はエリイさんとの食事なんで支援課に来ている。またミシユラムに行くんですけどね。2日連続だと店員に顔覚えられてそうだなあ。『うわあ……、こいつ昨日と違う女連れ込んでやがる』とか思われねえかなあ。まあ気にしないけどね♪言いたい奴には言わせとけばいいんだよ。どうせ何もできやしない。

そんなことを考えていると入り口の扉から誰かが入ってきた。

「お？リイン、まだ行ってなかったのか？」

「ん？ああ、行きたいのは山々なんですけどエリイさんがまだ来てないんですよ」

「あれ？確か記念祭の開会式で疲れたから部屋で休んでるって昼くらいに聞いたが」

「あゝわかりました。エリイさんの部屋に行ってみます」

「おう。まあ楽しんでこいよ。俺は部屋で一人寝酒して寝るわ」

「あはは、了解です」

~~~~~

エリイさんの部屋の前に着いた俺は、ドアを叩きエリイを呼んだ。

「エリイ〜さん。そろそろ行きたいんだが」

……返事がないな。いないのか？

確認のため扉をあけ部屋の中に入った。

「エリイ〜さん？」

中を進んで行った俺は、ベッドの上にいるエリイを発見した。

「エリイさんそろそろ行か……な？」

エリイさんを起こそうとしたが俺はそれを止めた。何故ならエリイさんはドレスを着たまま寝ていたからだ。

（昨日の朝に続いてこれか！これは誘ってんじゃないかと勘違いしそうになるわ！……にしてもすごいなこのドレス……。エリイさんのためにあると思うくらい合うな。普段のエリイさんより、どこか神秘的な雰囲気を感じる。それより起こすか……）

「お〜いエリイさん、そろそろ来ますよ」

「ん、んん……」

「エリイさん……」

エリイさんの肩を揺する。

「んん？おはようリイン君…」

「はい。おはようございます」

「ん〜リインく〜ん……」

「ちよ、ちよつとエリイさん!？」

エリイさんは寝惚けているのか俺の腰に抱きついてきた。

（おいおいいい加減にしてくれよ…。またされた挙げ句にこんなエリイさん。生殺しじゃないか！……ふざけんなよ）

俺は開き直り、エリイさんを押し倒した。エリイさんはやつと目が覚めたのか今の状況に困惑していた。

「あ、あれ？リイン君？なんで…」

「おはようございますエリイさん。もうとつくに約束の時間過ぎてますよ?..」

「え？本当だ！ごめんなさいリイン君。ドレスも着たままなんて…」

「そうですね。結構待ちましたよ」

「うう、ごめんなさい…」

「ところでエリイさん。待たせたんだから、お仕置きされても文句はないですよね」

「え？何を……つきやあ!？」

俺はエリイさんのドレスの下を少しめくり、太腿を触った。

「ちよつとリイン君!?!何を……」

「エリイさ……いや、エリイ。待たされた挙げ句こんなドレスを着られて俺、もう限界なんだ。責任取ってくれ」

「せ、責任取って……あ……」

太腿を擦りながらエリイの鎖骨にキスをし、段々上にしていき、首にキスした。

「エリイ……」

「り、リイン君……」

首から俺はエリイの唇にキスをした。

5話：クロスベル創立記念祭④

運動会も終わった後、シャワールームに二人で入り、ベッドにお互いに裸で寝ていた。

「エリイ、ご飯どうする？」

「もういいかな…疲れちやったし」

「はは、少し激しかったか？」

「うう／＼／やめてって言ったのに」

「あそこまでいってやめるわけないだろ。それにエリイだって言うほど抵抗してなかっただろ」

「な！そ、それはリイン君が！……ねえ、リイン君は本当に私のこと好きなの？」

「好きじゃなかったらあんなことしないよ」

「もう……けど、他にもいるんでしょ？」

「それは……。やっぱり嫌か？」

「嫌か嫌じやないかって言われたらもちろん嫌だけど……やめてくれないんでしょ」

「ああ、無理」

「じゃあ、もういいよ……わ、私のこともちゃんと愛してくれたら／＼／」

エリイは顔を赤くしながらそう言った。

「ちやんと愛してるから安心しろ。可愛いなあ」

赤くしたエリイが愛しくて、胸に抱き締めた。

「もう……好きだよ、リイン君」

「ああ。俺も好きだ、エリイ」

エリイは俺の背中に腕をまわして言い、それに俺はより強く抱き締めて言った。

~~~~~

「……イン君、リイン君起きて」

「ん…………おはよう、エリイ」

「おはよう、リイン君。そろそろ服着て朝食の時間よ？」

「うくん、わかった……」

「ふふ……」

エリイはニコニコしながら頬をつついてきた。

「……なに？」

「んーん。なんにも」

「……エリイ」

「んっ………ちゆう……んはあ………もう」

「ほら、もう朝飯の時間だぞ」

「リン君が起きるのが遅かったなのに」

「なんだ？またキスしてほしいのか？」

「してほしいけど………今はいいわ。はやく行きましよ」

「はいよ」

~~~~~

いつもどおりの朝食………のはずなんだか、何故みんなしやべらないんだ？おかしい………あのランデイさんでさえも黙っている。ロイドさんとテイオちゃんなんか若干顔が赤いし、風邪か？

「お、おいなどでみんな静かなんだ？」

「知らないわよ。朝からずつとこんなだし……」

ふむ、エリイも知らないのか………しようがない。俺から話題をふるか。

「ロイドさん今日の依頼はどんなのがあるんです？」

「へ!?!、依頼かい!?!そ、そそそうだね!?!頑張ろうか!?!」

「は？まあそうですね」

どうしたんだロイドさんとうとう頭がおかしくなったか？

「テイオちゃんは今日の依頼何か知ってる？」

「気持ち悪いです話かけないでください視界に入れないでください近寄らないでください」

「ええ!?なんかごめん……」

マジかいつの間に嫌われたんだ……

「ら、ランデイさん今日は静かですね、どうしたんですか？」

「…お前、本気でそんなこと聞いてんのか？」

「え？は、はい」

「俺昨日ずっと部屋にいらって行ったよなあ？」

「はい。言ってみましたね」

「そしたらな？なんか上から物音がしてきてな？」

「……………」

「気になって上がってみたらお嬢の「すいませんでしたあああああ」

ああああそういうことね！みんな聞こえてたのね！なんかごめんねうるさくて！そんなに大きかったかい!?けどそれはエリーのせいだよ！俺そんな声だしてないもん！

「エリイ謝れよ。お前のせいだぞ」

「えええ!? 私のせいなの!? り、リン君のせいであんな…あんなに大きな声出しちゃったんだからリン君が悪いんじゃない!?」

「な!?俺が悪いのかよ!!元はと言えばエリイがあんなドレスでいるのが悪いんだろう!? あんな神秘的な雰囲気出しやがって背徳感が半端なかつたわ!!」

「な!?だ、だからつてあんなに、執拗になんどもせめ「朝からそういう話はやめてくれませんかねえ!?」ご、ごめんなさい!」

あまりの気まずさにランデイが吠えた。

「まあなんだ、そういうことする事に文句はねえがもう少し静かにやるか、他所でやってくれると助かる」

「そ、そうだな。さすがに聞かされる身としては仕事に支障が出るしな…」

「不潔です」

「ご、ごめんみんな。これからは気をつける。……不潔とは言うがなテイオ、お前もいつかはや「不潔です気持ち悪いですセクハラですイカ臭いです」をい!!臭くはないだろ! シャワーしたわ!」

「はは、まあ今後気をつけてくれりあ俺達は気にしねえよ。それよりもリン。タメ口の方がしつくりくるし、そっちでいいぞ。そっちが素だろ?」

「ああそうだな。リインに敬語使われるとなんか気持ち悪かったんだ」
 「今も気持ち悪いです」

「わ、わかった。そうさせてもらうわ。ティオそろそろ許し「気持ち悪いです」…はあ」
 「しようがないわよ、リイン君」

落ち込んでたらエリイが頭を撫でてくれた。さすが俺の嫁!!どっかの遊撃士とは大違いだ!あ、あれも俺の嫁か。

「まあこの話はそのくらいにして…:リインは今日どうするんだ?」

「ああ今日は遊撃士協会に行こうかと今日くらいに戻ると聞いたんで」
 「そうか。どこも混んでるだろうから気をつけてれ」

「了解」

~~~~~

支援課を出たリインは遊撃士協会に来ていた。

「おはようございます!」

「あら?リイン君じゃない」

「どうもですミシエルさん。誰かいるかなあつて思つて来たんですけど、いないみたいですね」



ラインが言ったとおり、協会の中にはミシエル以外誰もいなかった。

「ああ、さつきまでエステルちゃんもヨシユア君もいたんだけどね」

「むう、入れ違いですか」

「待つてればそのうち帰つてくるでしょうけど、どうする？」

「（んん）。確か原作だと港湾区に来るはずだし…」いや、せつかくですしいろいろと見て

まわつてきます」

「そう？それじゃあまたね」

~~~~~

港湾区。今この場にある二つのグループが出会っていた。

「おう、ワジ！いいところであつたなあ！そろそろ俺と決着つけるや！」

「ふう、僕としてはせつかくの記念祭を楽しみたいんだけどなあ」

「んなことより喧嘩の方がおもしろいだろおがあ！」

「うん、しつこいなあ…。じゃあこつちの条件のんでくれたらいいよ？」

「条件なあ？」

「そう。僕は記念祭を楽しみたい、君は喧嘩したい。なら勝つた方が記念祭での飲み食い代を払うつてのはどうだい？ついでにチーム5人のタイタン勝ち抜き制にでもしよ

うか、お祭りだし」

「いいぜえ？面白そうじゃねえか!!」

両チームのメンバーも乗り気なようだ。

盛り上がったその場に声をかける者がいた。

「すいませ〜ん。発言いいですか〜?」

「ああ?」

「ん?なんかようかい?」

リインは手を上げてワジとヴァルドの前に出た。

「近くで話を聞いてただだの観光客です。ひとつ提案なんです。がせつかくのお祭りって

言うんだったら一般人巻き込みませんか?」

「どこのだれだか知らないけど、さすがに一般人に僕らの相手は危ないと思うよ?」

「あ、違います違います。どっちのチームが勝つか掛けをしましょうってことですよ!」

「ふ〜ん?いいんじゃない?別に。ヴァルドはどうだい?」

「どうでもいい。それよりさっさと始めようぜ!!」

「というところで邪魔しないならそっちで勝手にやっつけていいよ」

「ありがとうございませ〜す!」

「ふくん凄いいんだね君。名前何て言うんだい？」

「名前ですか？リインです。リイン・シユバルツァー」

「シユバルツァー……。なるほど、君が噂の……」

え？何？俺の噂ってクロスベルまで伝わってんの？いやもしかして七耀協会の方か？いや違う。ただワジが情報通なだけだ。そうだ、きつとそうだ。そうであってくれ！

「へ、へえ。そんな噂になってます？」

「うん。帝国に知り合いがいてね、たまに帝国の情報が入ってくるんだよ」

マジか。知り合いって誰だ？まあこれでクロスベルではたぶん噂にはなっていないだろう。うん。

「ふふ、クロスベルには女性を口説きにでもきたのかい？」

「はは、それもありますけどクロスベルには人に会いに来たんですよ」

「ふうん、そうなんだ。よかつたら女性を紹介でもしてあげようか？副業でホストやってるからそれなりに知ってるよ？」

「へえ、ホストしてるんですか。ワジさん綺麗ですもんね。モテるんじゃないですか？」

「ふふ、君には負けるよ」

いやいや、んなわけないでしょ。俺とは系統が違うけど、中性的な綺麗な顔してるじゃん。てか、本当に男ですか？反則だろ。

「俺の場合帝国だと噂が広まってるんで向こうからそうそう来ないんですよ。まあ変な人が来ても困るんでいいですけどね。どのみち気になった女性には自分から行くんで大丈夫です」

「そのようだね。先日も女性遊撃士を落とすたようだし」

「え？なんで知ってるんです？」

「その遊撃士クロスベルでは有名らしいよ、綺麗だし。まあクロスベルでは遊撃士は人気だから余計にね。そんな有名な男と二人でミシユラムに言ったら噂にもなるよ」

「へえそうなんですか。あんまりその手の噂流れたらナンパに影響しそうですし少し大人しくしようかな…」

「できるのかい？」

「たぶん無理ですね。性分なんで」

「ふふ、刺されないように気を付けなきゃね」

「いつそうなってもおかしくないですからね、俺。まあ気を付けます」

最初から俺のことは伝えるしそうそうないだろうけど。あるとしたら落とした女のフアンとか好きな男だろうな。返り討ちにするけど。

「さ、そろそろ始めようとするかな？向こうもうちのも限界みたいだし」

「そうですね」

~~~~~

テストメンツとサーベルバイパーの不良が互いの武器を打ち合っていた。

(やつぱあんま面白くないなあ…。不良といっても結局は一般人のどつきあいだし)

まわりは盛り上がりつつあるようだが、リインはつまらなそうに見ていた。そこに、

「ちよつとちよつと！あなたたち、なにしてるのよ？」

「あん……………」

「…………へえ…」

「おお!!」

きたー！太陽の娘エステルさんと真のヒロインヨシユアじゃないか！空の軌跡の主人公エステルさん。短期間のうちにありえないくらい経験を積まされる人。プレイした時はこいつ敬語しらないの？つてくらいに年上にもタメ口でマジかこいつ…つて思っただけだね、今は好きだよ？そしてヨシユアさん。彼、凄いいよね。何が凄いつてあの頭おかしいんじゃないの？つてくらいにエステルLOVEなどこね。なんといつてもクローゼに告白されて断るんだぜ？ありえないだろ！皆口ボイスだぜ!?!あの容姿に聖母のような性格。断るなんて俺には無理だね。

「まったく、連絡を受けて身に来てみればゾロゾロと……。あなたたち、旧市街のテスト

メンツとサーベルバイパーね？喧嘩は終わり！とつとと解散しなさいよね！」

「なんだあ、てめえらは……」

「遊撃士協会に所属する者です。あなた達が喧嘩していると連絡を受けて、仲裁に来ました」

「遊撃士だとお……!?!」

「エステル・ブライトにヨシユア・ブライト……ふふ、雑誌で何度か見かけた事があるね」  
「あのカシウス・ブライトの子供らしいですよ」

「へえ、そうなんだ。納得だね」

「そりやどうも。不良中年の娘だからみたいな言い方が気に食わないけど。それで？あなたたちが両チームのリーダーってところ？」

「一応ね。僕はテストメンツのワジ。こつちがバイパーのヴァルド。こつちは今やつてる賭けの仕切ってるリインさ」

「ん？リインってどこかで聞いた名前ね？どこだっけ？」

「あれだよエステル。エオリアさんの……」

「ああ！初対面で口説いたっていう。夜は？可愛いって言ってたけど可愛いかな？朝でも夜でも顔かわらないでしょうし……」

（あのアマ……なんてこと言いふらしてんだ!?!）

「エステル今はそれより……。みたところ、喧嘩をしている訳じゃなさそうだけど……？」

「ふふ、単なるお遊びさ。せっかくの記念祭だからね。どうせだったら普段と違うことしようと思つてさ。それでチーム制勝ち抜きタイムバトルして負けたら記念祭での飲食費を払うつてわけさ」

「なるほど、試合みたいなものね。せれなら別に構わないか……。つて、違う違う！ 試合するのとはともかく、こんな所でしちやダメでしょ！」

「ハツ、そんなの俺らの勝手だ。しかしてめえ……。遊撃士だか何だか知らねえが随分と偉そうなクチ叩きやがるな。調子にのってんじゃねえのか、アア？」

「あのね……。調子に乗つてるのはあなた達でしょ。あたしは常識的なことを言つてるだけじゃない」

「このアマ……」

ヴァルドは感に触つたのか、エステルに近づき胸ぐらを掴もうとしたが、

「せいっ!!」

「あ……?」

エステルはヴァルドの腕を掴み、そのまま一本背負いをした。

（あ、この位置だとエステルさんのスカートだな……。あ、すいませんなんでもないです。



だからヨシユアさんそんな睨まないで！)

「やるね」

「えつと、大丈夫？」

「ククク……ハハハハハハツ!!……悪かった。女だと思つて侮つてた。だがよ……さすがにナメすぎなんじゃねえか？」

「……あ、危な……!」

ヴァルドは木刀を構えエステルに振り下ろした。それをエステルは後ろに飛んで回避した。

「エステル……!」

ヨシユアは庇うようにエステルの前に出た。

「やれやれ……君達もちよつと調子に乗りすぎじゃない？」

「ああ、そうみたいだね。だからと言って謝るのもスジが違うとは思うけど……」

「クク……目の色が変わりやかかったな」

「……」

ヨシユアは武器に手を触れた。

「著、ちよつとヨシユア！あたしは大丈夫だからあんまり本気にならないでよ!!」

「別に本気出しても大丈夫ですよ？その時は僕も参加させてもらいます……」

そう言いリインはヴァルドとワジの間に出た。

「……!? (まずいな、彼相当強い……!?)」

今にも戦闘が始まりそうな雰囲気の中……

「待った! 話は聞かせて貰ったよ。双方とも……まずは落ち着いてくれ」

ロイドが声をかけ、支援課四人がやって来た。

「ハッ、落ち着いてられるかよ! 遊撃士! いいじゃねえか! 噂には聞いてたが、まさかここまでゾクゾクさせてくれるとはなあっ!!」

「だから落ち着いてくれって言ってるだろう……。そもそもここは公共の場所だ。タイマン勝負にしてもスジを通すにしても他の場所でやってくれ」

「ん、そうはいつでもねえ。ここまで盛り上がった以上、ハイ解散つてもアレじゃない?」

「ワジ……!?!」

「ヴァルドは頭に血が上ってるし、お姉さんたちもお仕事で来ている。お互い勝負するくらいしかスジは通せないんじゃないかな?」

「クク、その通りだぜ……!」

「そうたそうだ! さっさと帰れこの弟ブルジョワジめ!」

「……あたしも何だかちよつと腹が立ってきたわね。そっちがその気なら決着を付けて

もいいんですけど?」

「上等だ……!」

「ああもう……! ヨシユア! 君も何とか言ってくれよ!」

「……ごめん。僕もちよつと退けないかな」

「うっ……」

「ふふ、それじゃあ僕はヴァルドに加勢しようかな。さすがの君もその二人を相手にするのは厳しいだろうし」

「ケツ……勝手にしろや」

「待つて待つて! 何勝手にワジさんがやろうとしてるの!?! ここは平等にじゃんけんにしましょう! なんだったら二人とも俺がやりますよ!」

「何を言ってるんだい? 君はただの賭けの仕切りの人だろう。君が部外者なんだし君は見てなよ」

「だあああゝっ! だから何でそうなるんだって!」

「……あのよお。そんなにやり合いたいんなら別の方法でやればいいんじゃないかね?」

「え……」

「ふうん……?」

「せっかくの祭だ。遺恨を残してもつまらねえだろ。だったらスカツとする方法で決着

を付けるっつーのはどうだよ?」

「スカツとする方法だあ……?」

「何言ってるんですかランデイさん!!直接やり合うのが一番ス「はいはい、リイン君はこつちにこようねえ」ちよつとエリイ離…むぐう!」

エリイに後ろから手で口を塞がれ、そのまま支援課のいる方へ引きずられていった。

「えつと……ランデイさん、どういうこと?」

「あ、ああそいつはな……」

~~~~~

ランデイの説明を聞いた一同は旧市街に移動した。

妨害あり何でもありの旧市街の地形を利用したチェイスバトルなのだが……

「何で俺は駄目なんだよ……」

これは二人一組らしく、不良チームはワジとヴァルト、遊撃士チームはエステルとヨシユア、それとなぜか参加する支援課チームはロイドとランデイ。支援課がやるなら俺もいいだろつてことで一緒にやってくれる人探したけど誰もやってくれない。なら一人でいいからつて言ったけどルールだからと押し通された。

「まあまあ、そんなに落ち込まないの」

隣にいたエリイが頭を撫でて慰めてきた。くそう！こうなったらエリイに甘えるとするかと言うことでエリイの胸に抱きついた。

「不潔です……」

！
なんかティオにゴミを見るような目で見られている気がするけどそんなこと知るか

~~~~~

そしてなんだかんだあつて、レースは支援課の勝利に終わった。そして俺と支援課はビルに帰り、各々自分の部屋で寝た。俺は勿論エリイの部屋だけどね！やることやって、俺も眠りについた。

## 6話：クロスベル創立記念祭⑤

朝食を支援課のみんなと食べ、支援課ビルを出たリインは、ローゼンベルク工房に向かっていた。

（今日は原作からいくと少なくとも昼過ぎにはレンは工房にいるはずだ。今から行ってみていなかったら張り込むか）

リインが今日の行動を決めていると、

「おはよう、リイン君♪」

「ん？エオリアか、おはよう。てかお前、なんて噂流してくれてんだ！エステルさんはわかってないけど、ヨシユアさんは絶対分かってるから！しかもエステルさんのせいで支援課の人にも聞かれたし！」

「え〜？私の旦那こんな可愛いんだよ〜って自慢したいのに〜」

「ホントやめてくれ。自慢するなら夜以外のことにしてくれ」

「う〜ん、わかった〜。そうだリイン君、私今日仕事夜からなんだ〜」

「ふうん、そうなんだ」

「だから、今から……しよ？」

そう言つてエオリアはリインの腕に抱きついた。

「いやいや、俺今から用事あるから無理だつて」

「え〜？奥さんより大事なことつて何？あ！もう新しい人増えたの？はやいな〜」

「たしかに増えたけど、それとは関係ない」

「え〜!?!本当に増えたの!?!誰、誰?!」

「エリイだよ、支援課の」

「あ〜エリイちゃんね、可愛いよね。私はティオちゃんの方が好みだけどね!……それよりいつからエリイちゃんど?」

「えつと……昨日だな」

「一昨日つてことはどうせリイン君の事だからその日のうちやるだろうし、昨日もエステルちゃんの話だと支援課と帰つたらしいからやつてるわね……。エリイちゃんの方が一回多いじゃん!!不公平だ〜!私ともヤろ〜!」

「うるさい、声でかいつて!昼間からヤろヤろつて痴女かお前は!」

「もう痴女でいいからさつさといくよ!」

「ちよ!お前待つ!おいつ!どこにこんな力つ!」

~~~~~

結局そのあとエオリアに昼過ぎまでしっかりと搾り取られたリインは、急ぎローゼンベルク工房に向かい、着いた頃には夕方になっていた。

（くそっ！もう夕方じゃないか！もしかしたらティオ達との遊びは終わってるかもな……）

そう思いながらリインは門に近づいた。

「（インターホンとかなないのか？仕方ない……）すいませ〜ん！誰かいますか〜？」

リインはとりあえず大声で呼び掛けてみる事にした。

（……返事なしか？最悪忍びこんでも『あら？何かが用かしら？』）

リインはどこからか誰か声を掛けられた。

「（どこかカメラでもあるのかね？この声はレンちゃんか、普通にやっても入れてくれないだろうし……）どうもすいません。少しお話でもしようと思ってきました」

『あらごめんなさい。今おじいさん出掛けてるの』

「いや、今日は仔猫ちゃんとお話しに来たんだよ」

『っ！……へえ、よくわかったわね。支援課のお兄さん達にでも聞いたのかしら？』

「それとは別口。それで仔猫ちゃん？正解者のご褒美に俺とお話でもしてくれないかい？」

『……ふふ、いいわよ？私も少しお兄さんに興味が湧いたからお話してあげる。ちよっ

と待ってて』

しばらくすると門が開き、奥から董色の髪をした少女が出て来た。

「初めましてお兄さん。私が仔猫。レンって言うの。よろしくね」

「ああよろしく。リインだ」

~~~~~

自己紹介の後、レンちゃんのご案内によりローゼンベルク工房の中に入り、今はレンちゃんとお茶をしていた。

「それでお兄さんは私に何のお話をしに来たの？」

レンは紅茶を飲みながら俺に聞いた。

「ん？特に決めてないよ？ただレンちゃんとお話したくて来ただけ」

「……本当にそれだけ？支援課のお兄さん達と知り合いならハッキングとかしてた私を捕まえに来たんじゃないの？」

「たしかに俺は支援課の人とは知り合いだけど、俺は警察じゃないし。そもそも帝国から旅行に来てるんだよね」

「へえ、お兄さん帝国人なの。それにしても私とお話をしに来ただけなんて、お兄さん変わってるのね。もしかして口の付く四文字の人？」

「たしかにレンちゃんは可愛いけど手を出したりしないよ。俺は紳士だからね」

「あらそうなの？ふふ、可愛いなんて嬉しいけど私、もう立派なレディなのよ？綺麗って言われた方が嬉しいわ。あとそのレンちゃんって言うのも子供扱いされてるみたいで嫌だわ。レンって呼んで？」

「ああ、わかったよレン。…それにしても凄いねこの子、かつこいいな」

俺は横にいる巨大ロボットを見た。

「そうでしょう？パテルⅡマテルⅡマテルⅡって名前でも強くて私を守ってくれる私の大事な家族なの！」

「へえ、レンの家族は強いんだな」

「ええそうよ？レンの家族はとっても強いんだから！」

「そうなんだ。パテルⅡマテルも凄いけどレンも凄いね。ハッキングとかできるなんて」

「ハッキングなんて簡単よ、レンは天才なんだから。これでもレンとても強いなのよ？」

「へえ、そんな風に全然みえないなあ。それが本当なら何でもできそうだな」

「そうよ？私にかかればどんな願いでも叶えさせるわ」

「へえ、そうなんだ………じゃあ何で逃げてるんだい？」

「……何を言ってるのかしら？」

「わからないかい？ エステルさんだよ」

「っ!!……そう、お兄さんエステルの知り合いなんだ。本当はレンを探してエステルのところに連れて行くのが目的ね」

レンは目を鋭くさせ言った。

「いや？ 別にエステルさん達に言うつもりはないよ。ただレンは何がしたいんだろうって思ってるね」

「……どういう意味かしら？」

「だってそうだろう？ 何でも願いが叶うなら何でエステルさんを諦めさせてないんだい？」

「！そ、それは……」

「レンもわかってるんじゃないのか？ 自分の気持ちを……自分がどうしたいのか」

「……今日あつたばかりのあなたにいったい何がわかるっていうの……!?!」

「わからないさ。知識としては知ってるが、俺は君じゃないんだ。今までレンがどんなことを思っただけで逃げてきたのかは知らない。けど、俺にしかわからないこともある。……とりあえず、今日はこの辺にして俺は帰るよ」

そう言っただけで俺はレンの横を通りすぎ、部屋の出口で止まった。

「レン、記念祭だ」

「え?……」

「今やってる記念祭中にレンにとって必要な出来事がある。それが終わったらまた話そう」

そう言い残し、俺は工房を出た。

そして支援課ビルに戻った俺は、今日はエリイとやらず、そのまま寝た。

## 7話：クロスベル創立記念祭⑥

「おはよう、レン！今日もいい天気だな〜」

昨日に続き、俺はレンに会いに来た。

「……お兄さん、レンまだ必要な出来事っぽいのに出会ってないのだけど？」

「たしかにあつた後会おうと言ったが、その前に会いに行かないとは一言も言っていないぞ？それよりデートにでも行かないか？奢るぞ？」

「……もういいわ。ならエスコートしてくださいませんか？お兄さん」

「よろこんで」

レンは手を差し出し、それを俺がその手を取り、そのまま握りクロスベルに向かった。

~~~~~

クロスベルに着いた俺達は、屋台で気になったのを食べたりし、今はパレードを見ていた。

「なかなか混んでるわね……」

「まあ記念祭の目玉の一つだからな」

レンは混んで見えないのか背伸びをして何とか見ようとしていた。

「(……………しようがない) レン、ちよつとごめんな」

「え？何……………きやあ!？」

俺はレンの股に頭を通し、そのまま足を掴んで持ち上げた。

「ちよ、ちよつと!?!この年で肩車は恥ずかしいのだけど……………／／／」

「気にするな誰も気にしてないよ。それよりこっちの方が見やすいだろ?」

「そうだけど……………もう」

俺がやめないとわかったのかレンは大人しくパレードを見ていた。

「なかなかユニークな見た目ね」

「ああ、ミシユラムのテーマパークのマスコットだな。結構人気らしいぞ? テイオも好

きらしい」

「へえ、意外と子供っぽいのね」

レンとそんなことを話しパレードが終わった後、俺達はアンティーク屋に来た。

「ねえねえお兄さん。この子可愛いと思わない?」

そう言つてレンは董色の猫のぬいぐるみを抱き締め、自分ごとこちらに見せた。

「たしかに。レンに少し似てるし可愛いな」

「あら?それは間接的にレンが可愛いと言ってるのかしら?上手なのねお兄さん」

「実際レンは可愛いしな。よし、そのぬいぐるみ買ってあげるよ」

「あら？レンに貢いで、溺れてもしらないわよ？」

「とつくにレンに溺れてるよ」

「あら？……ふふ、レンも罪な女ね」

レンは頬に手を当て首を傾げ困ったポーズをしたが顔は笑っていた。

「それじゃあ買ってくるから。……そうだ。レン、ちよつと飲み物買ってきてくれないか？」

「女性に飲み物買いに行かせるなんて、紳士としてはレディの扱いがなってないんじゃない？」

「ごめんごめん。けど今凄く喉がかわいたんだ。レンの分も買っていいから頼まれてくれないか？」

「しようがないわねえ……いいわ。レンが買いに行つてあげる」

「ありがとな。あと少し俺寄るところあるからしばらく好きにしていいて？こつちで見つけるから」

「……そう。ならまた後でね、お兄さん」

「ああ、またな」

~~~~~

(……さて、先回りするか)

ぬいぐるみを購入したあと、俺はレンと支援課の皆が来る前に西クロスベル街道に向かった。

~~~~~

(……ここら辺でいいか)

西クロスベル街道に来た俺は見晴らしのいい崖の上に行った。

(にしてもコリンはレンと違ってほんわかしてるな。まああの年齢ならあれが普通か

……お、来たな)

暫くすると、レンを連れた支援課が蝶々を追いかけるコリンを見つけ安堵していた。

(おいおい、ここはまだ魔獣が出る街道だぞ？安心してる場合じゃないだろ……)

そう思った矢先にコリンの周囲を六体の魔獣が取り囲んだ。

そして支援課が武器を構え向かおうとする頃にはレンがコリンの下へ走り、魔獣を二体一撃で倒し、コリンを抱えてその場から引き、入れ替わりで支援課が到着し、残りの四体と戦闘が始まった。

(レンはよくあの小さな体であんなでかい鎌振り回せるな。……にしても弱いな支援課。

まあこれから期待、かな)

その後、魔獣を倒した。支援課とレンは、泣き疲れて寝たコリンを連れクロスベルに戻り、リインも続いて戻った。

~~~~~

クロスベルに戻りそのままローゼンベルク工房に向かい、門の前でレンの帰りを待った。暫くすると、目を赤くし、少しすつきりしたような顔をしたレンが来た。

「…おかえり、レン」

「お兄さん……。お兄さんには分かってたのね、レンのことも、あの人達のことも……」  
「ああ、知ってた。レンがあの人達をどう思っていたか、あの人達に本当は何があったのか」

「そう…お兄さんもありがとうね？レンがここに来た理由、一つなくなったから」

「お礼はいらない。俺が居なくても、支援課の皆がやってたさ。実際そうだったろ？」

「たしかにそうね…でも、それでもレンのためにやってくれたことにはかわりないわ。

……ねえ、どうしてお兄さんはレンの事を気にしてくれるの？レンが今まで……楽園とか、結社でのこと知ってるんでしょ？」

「ああ知ってる。けど、それでレンの事を嫌いに俺はならないよ。俺はレンが大好きだ

「からな」

「レンなんて、お兄さんに好かれるような……」

「たしかにレンは酷い事をしたりされたりしたよ？ 頭も良くて大抵のことはできて普通じゃないかもしれない。」

「けどおれの知識の中でも、俺の目で今まで見たレンも人をからかったりするけど、意外と面倒見がよくて優しく、ぬいぐるみが好きで、自分に対しての愛情に素直になれない、そんな可愛くておませな普通の女の子なんだ。……だから、そんなに自分なんかとか思うな！俺は今までの事全部含めてレンの事が好きなんだ！」

「……………ふふ、まるでエステルみたいね」

「俺はエステルさんみたいにはなれないよ。あの人は本当に太陽そのものみたいな人だ。俺なんかがいなくても、いつかレンと家族になって幸せにしてくれるだろう。けどさ……………」

「……あつ……………」

俺は屈み、レンとの目線の高さを合わせ抱き締めた。

「もう一人、家族がいても別にいいだろう？ エステルさん達と違って俺は会ったばかりだけだし、それでもレンが大切なのは同じだ」

「……………」

「…別に嫌なら断つてくれていい。本来、この役目はエステルさんとヨシユアさんで十分なんだ。ただ、俺もレンと家族になりたいって我が儘なんだ。だから…「いいわ」……いいのわ？」

レンは俺の背中に腕をまわし答えた。

「いいわ。だってレンのすべてを知つてもレンの事をずっと好きでいてくれるんでしょ？……そんなの断れないわ」

「いいのわ？俺がいなくてもエステルさん達が……」

「レンがいいって言つたらいいの！……それに、別にエステルは家族じゃないんだから！」

「はは、そこは素直になれないんだな……」

「ほ、ほんとのことなんだから……」

「ツンデレさんだな」

「むうう！レディを辱しめるなんてお兄さん全然紳士じゃないわ！」

レンは頬を膨らませながら俺の胸を叩いた。

「ごめんごめん。…なあレン、そのお兄さんって言うの違うのに変えてくれないか？」

「え？」

「だってそれ、レンが他人の年上に使う呼び方だろ？家族なんだしその呼び方嫌だな俺」

「そうね。けど何にしようかしら?」

「エステルさんとかヨシユアさんは呼び捨てだよな?」

「そうね。ヨシユアは兄みたいなものだったし、エステルは昔そう呼んでつて言われたから」

「そうなのか……それじゃあ一発で、家族つてわかるようにしてエステルさん達を悔しからせよつか。お兄ちゃんとかどう?」

「それはいいわね!けど、お兄ちゃんは少し子供っぽいわ。レン、もう立派なレディなんだから!そうねえ……じゃあお兄様にするわ。昨日調べただけでお兄様帝国の貴族なんでしょ?貴族っぽくていいでしょ?」

「そうだな……そうするか。エステルさん達に自慢気しよつかなく」

「お兄様性格悪いのね。エステル泣いちゃうわ」

「それならさつさとエステルとも家族になればいいだろ?」

「嫌よ。今さら家族になつてなんて言えないわ。……それにレンの過去を知つたらきつと幻滅するわ。そしたらきつとレンと家族になつて言わないわ。それにもうお兄様がいるからいいわ」

そう言うのとレンは強く俺を抱き締めた。

「エステルさんは知つても大丈夫だと思ふけどな。……それに俺は明後日になつたら帝

国に戻るし、しばらく帝国で忙しくなるからレンの助けに行けそうにない」

「ならレンも帝国に行くわ!」

「レンはクロスベルにやることがあるんだろ?それにパテルⅡマテルのこともあるだろ?……安心して、俺もレンのおかげで決心が着いた。数年したら俺もレンの所に行くから」

「ほんと?」

「ああ、必ずな。それまでにクロスベルでいたいこと終わらせとけよ?特にエステル達のこととはどんな形であれけじめは付けろよ?心配しなくても悪くはならないさ」

「それはお兄様の知識でのこと?」

「そんなの知らなくてもエステルさんを信じれる、それだけだ。それに遠くない内に俺のはほとんど使い物にならなくなるしな。あ、そうだ!ほらぬいぐるみ。俺だと思つて大切にしろよ?」

「ふふ、このぬいぐるみ私に似てるんでしょ?お兄様じゃなくてレンにしか見えないわ。でもありがとう、大切にするわ。……そうだ!お兄様!ちよつと待つて!」

そう言うとレンは工房の中に入っていった。しばらくしてレンは黒いぬいぐるみ持つて戻つて来た。

「買つてくれたぬいぐるみのお礼にこの子あげるわ。レンのぬいぐるみの中でも一番好

きな黒うさぎのぬいぐるみよ。レンだと思つて大切にしてね？」

そう言つてレンは俺にぬいぐるみを渡した。

「ああ、大切にする。なんだったら毎日抱いて寝るよ」

「ふふ、ならレンもそうするわ」

レンは嬉しそうに笑つた。

「…さあ、そろそろ暗くなるからレンは中に入れ」

「わかつたわ。……ねえ、明日も会える？」

レンは寂しそうに聞いてきた。

「ああ、いいぞ。それじゃあ明日な？あ、ロイド達にお礼。しつかりやれよ？」

「わかつてるわ。……おやすみ、お兄様」

「おやすみ、レン」

~~~~~

レンとわかれたリインは支援課の皆と夕食にしようとエリイに通信を入れた。

『もしもし？』

「あ、エリイ？リインだ。今どこにいる？」

『今？エステルさん達と龍老飯店に行くところだけど、リイン君もくる？』

「行くよ。少し時間かかりそうだから先に行つてて」
『わかつたわ』

通信を切つてリインはクロスベルに向かつた。

~~~~~

「ごめん、遅くなつた」

クロスベルに着いたリインはそのまますぐ龍老飯店に向かい、ロイド達の席に向かつた。

「おおリイン。遅かつたな」

「リイン君こんばんは！」

「こんばんは、リイン」

「ちよつとクロスベルにいらなくてね。エステルさんとヨシユアさんもこんばんは」

リインはランディに説明し、エステルとヨシユアに挨拶した。

「飯適当に頼んどいたから好きなの食え」

「わかりました」

~~~~~

「……なの。これがあたし達の知ってることよ」

食事をしながら俺達はエステルさんにリベールの異変の真実、そして結社についての話を聞いた。

「……すげえな二人とも。どんだけ修羅場潜ってたって感じだな」

「それにリベールでそんなことがあったなんて……」

「そして結社ですか。まさか、そこまでの技術力とは……」

「そしてレンがいたところ、か……」

ランディ、エリイ、ティオ、ロイドは驚きを隠せないでいた。

「まあ今は結社から離れてくれてるみたいだけど」

「そうか……そういえばリイン。レンと会った時間いたけど、今日レンとデートしてたんだったって?」

ロイドはふと思いついたのか聞いてきた。

「ん? うんしたよ、二人で」

「おいおいリイン。お嬢がいるのにレンみたいな子供にまで手を出すのかよ」

「あれ? リイン君エオリアさんと付き合ってるんじゃないの?」

ランディは呆れ、エステルは不思議そうな顔をした。

「言ったじゃないですか。俺、帝国貴族奥さん複数とるって。あとレンに手出してない

ですよ。俺とレンはそのなんじゃない、それ以上だ」

「だからつてはやすぎだろお。で、それ以上つてなんだ？」

ランディは再度呆れながら聞いた。

「いや、これ聞くとエステルさんとヨシユアさん悔しがらんじやないかな」

俺はニヤニヤしながら言った。

「え？あたし達が？んく気になる！どういふこと!？」

「リイン、どういふことだ!？」

「ふふ、驚かないでくださいよ？俺、今日からレンの家族になったんで。しかも兄です

!!」

俺は拳を突き上げて言った。どうだ！羨ましいだろ!？はっはっはー！さあどうだエステルさん！悔しいだろう!？先に自分より先に家族になられて悔しいだろう!？さあ

……

「あ、あれ？」

エステルさんは目と口を開いて固まり、ヨシユアも少し目を開かせ驚いていた。

(あれ？思ったよりリアクション薄いな)

そんな事思つてると、エステルは涙を流した。

「え!？エステルさん泣いて……すいません！まさかホントに泣くほど悔しがるとは！ホ

ントすいません！あ、ヨシユアさん言っときますけどわざとじゃないですからからね!!」

やべえくよ！エステルさん泣かせたらヨシユアさんに殺されるよ!

「違うのリーン君、別に悔しくて泣いたわけじゃないの。たしかにあたしが先に家族になれなかったのは少し残念だけど……それでも、レンに……レンにやつと家族って呼べる人ができて……」

「エステルさん……」

「僕からもありがとう、リーン。レンと家族になつてくれて」

「いや、そんな……エステルさんならいづかなれますから、俺がなくても……」

「たとえそうだとしても、君が最初に家族になつたんだ。だから、やっぱりありがとう」

「……はい」

そうヨシユアさんと話しているとエステルさんはいきなりその場で勢いよく立った。

「よくしーリーン君が家族になつたんだから、次はあたし達よ！待つてなさいよくレン!!それとリーン君!レンと家族ならあたし達とも家族よ!だから敬語はやめなさい!あたしも呼び捨てにするから!」

「はは……わかつたよ、エステル。ヨシユアもあらためてよろしく」

「うん。よろしくね」

「よかつた!よかつた!いやあくめでたいなあ。そういえば、リーン。その袋何は

「いつてんだ？」

「ああ聞きます？ 聞いちやいます？ いや〜ランディさんもひどいなあ、エステルさんに追い討ちをかけるなんて。それじゃあ見せますよ？ 刮目せよっ!!」

俺は勢いよく袋から黒うさぎのぬいぐるみを取り出した。

「え？」

「あら、可愛い」

「なかなかですね……」

「おお、予想外だ」

「そ、それは……!」

「もしかして……」

「ふっふっふ、二人なら知ってるかも知れないがレンは大のぬいぐるみ好きだ。俺が祭りでぬいぐるみを買った代わりにこのぬいぐるみを貰った。しかもコレクションの中でレンの一番のお気に入りだ! しかもお気に入りだからよく触ったりしてるんだろう。ぬいぐるみからレンの匂いがする! レンからはレンだと思って大切にしてと言われている。よって! 俺は毎日このぬいぐるみを抱いてレンの匂いを嗅ぎながら寝ることができるのだ!! どうだエステル、羨ましいだろう!」

「く、くう〜! あたしでもレンからプレゼントなんて貰ったことないのに!! ヨシユア〜

「あたしもレンからプレゼントほしく！」

「はいはい、次会ったら頼んでみよう？」

「ちなみに俺、お兄様って呼ばれてます」

「ヨシユアアアアアツ!!」

「はいはい」

リインは嬉しそうに自慢し、エステルは悔しがりながらヨシユアに抱きつき、ヨシユアはそれを慰めた。

「なんだこの状況は……」

「嬉しそうに自慢するリイン君もステキ……」

「エリイさんドン引きです……」

「はは、まあよかったよかった」

そして記念祭四日目も終わりを迎えた。

8話：クロスベル創立記念祭⑦

「…にしても、すげえよな。あんだけ強いだけあるわ」

「ああエステルさん達ね。私と同じ年なのに凄いわ」

「そんなエステル達より強い俺凄くないですか？」

「自分で言うなよ…」

「凄いわりイン君！カッコいいよくて優しくてそれに強いなんて！もう、惚れ直しちゃうわ！」

エリイはリインに抱きついた。

「ふ、ロイド。これが俺とお前の差だ。いつまでも天然ぶつてると俺との差が開くばかりだぞ？」

「なんか雰囲気出してるけど意味わからないからな」

そんな話を朝食のあとソファアに座りながらしていた。

するとビルの入口の扉が開いた。

「あ！お姉さんずるいわ！レンもお兄様に抱き付きたい！」

入ってきたレンはエリイが抱き付いてるのを見てエリイの反対側から抱き付いた。

「ふ、どうだロイド。そろそろ自覚しろ」

「だから意味がわからないって。……それよりレン？こんな朝からどうしたんだ？」

「昨日お兄様が会ってくれるって言ってたけど、待てなかったからレンからこっちに来たの」

「なんだレン、そんなに俺に会いたかったのか？可愛いな」

「きやつ！もうお兄様！髪がボサボサになっちゃうわ！」

レンの髪を両手で撫で回した。

「…にしても、すげえよな。あんだけ強いだけあるわ」

「ああエステルさん達ね。私と同年なのに凄いわ」

「そんなエステル達より強い俺凄くないですか？」

「自分で言うなよ…」

「凄いわりん君！カツコいいよくて優しくてそれに強いなんて！もう、惚れ直しちゃうわ！」

エリイはリインに抱きついた。

「ふ、ロイド。これが俺とお前の差だ。いつまでも天然ぶつてると俺との差が開くばかりだぞ？」

「なんか雰囲気出してるとけど意味わからないからな」

そんな話を朝食のあとソファアに座りながらしていた。

するとビルの入口の扉が開いた。

「あ！お姉さんずるいわ！レンもお兄様に抱き付きたい！」

入ってきたレンはエリイが抱き付いてるのを見てエリイの反対側から抱き付いた。

「ふ、どうだロイド。そろそろ自覚しろ」

「だから意味がわからないって。……それよりレン？こんな朝からどうしたんだ？」

「昨日お兄様が会ってくれるって言ってたけど、待てなかったからレンからこっちに来たの」

「なんだレン、そんなに俺に会いたかったのか？可愛いなく」

「きやつ！もうお兄様！髪がボサボサになっちゃうわ！」

リインはレンの髪を両手で撫で回した。レンはリインに抗議するが少し嬉しそうだった。

「あはは、悪い悪い。それじゃあ出かけるか」

「ええ、いきましょ。そうだ、お兄さん達にプレゼントがあるの、はい」

そう言うとなんか封筒をロイドに渡した。

「っ！っ！、これは!？」

「ふふ、ホントはレンが行こうと思ったけどお兄様と出かけるからお兄さん達にあげるわ。昨日のお礼も兼ねてね」

「各国のVIPにしか贈られないんだけど、どうやって……」

「それはヒ・ミ・ツ♪それじゃまたねお兄さん達。ほらお兄様行きましょ！」

「わかったわかった。それじゃみんなまたな！」

リインはレンに手をひかれ支援課ビルを後にした。

~~~~~

「お兄様、今日はどこに行くのかしら？」

「今日はM・W・Lミシユラム・ワンダーランドに行こう。夜は黒の競売会シユバルツオークションに行こうと思ってるんだがレンも行くかい？」

「ああ？」

シユバルツオークション

「黒の競売会に行くの？けどお兄様招待状持っているのかしら？」

「持っていないけど、俺とレンなら忍び込むなんて簡単だろ？」

「ふふ、そうね。レンとお兄様なら簡単だわ。ならレンもお兄様についていくことにするわ」

「わかった。とりあえず夜まではデートを楽しもうか」

「ええ、そうしましょ♪」



「……へえ、なかなか本格的だな」

M・W・Lミシユラム・ワンダーランドについたリインは建物などのできの良さに感心した。

「お兄様、はやく行きましよ！」

レンはリインの腕を引つ張った。

「そうだな、とりあえずまわるか」

~~~~~

《ルナティックゾーン》

バンツ！バンツ！

「お、おい……あの子すげえぞ……」

「さっきの青年も凄かったがあの子はそれ以上だ……！」

外にはルナティックゾーンのプレイ中の映像が流れていた。そこには少女が敵が現れた瞬間即座に引き金を引き、敵を倒していた。そして最後まで全ての敵を倒していた。

「ふう、なかなか面白かったけど少し簡単すぎね」

「けど凄いやないかレン。俺もパーフェクトだったが一つ一つの点数は低いからレンに負けたよ」

「ふふ、レンは天才なんだからこのくらい楽勝よ♪」

~~~~~

### 《鏡の城》

「あの鐘をならして鏡の前で願い事をするのか」

「ふふ、二つの紐を互いに引っ張って鐘を鳴らすなんていかにも恋人に人気が出そうな仕掛けね」

「そうだな。とりあえず鐘を鳴らして鏡の前に行くか」

最上階についた二人は鐘を鳴らし、鏡の前に来た。そして二人は目を瞑って願い事をした。

「……………」

「…………ふう。願い事はちゃんとできたか？」

「ええできたわ。お兄様は何をお願いしたのかしら？」

「もつといろんな女性と仲良くなりませうように」

「もう！お兄様ったらレンとデートしてるのにそんな事お願いするなんて！」

「はは、ごめんごめん。レンは何をお願いしたんだ？」

「レンはお兄様とずっと一緒に……」

レンは少し恥ずかしそうに言った。

「かわいくな〜レンは!!安心しろ!いつまでも俺はレンのお兄ちゃんだから!!」

レンが可愛くておもわずリインはレンを抱き締め、くるくる回った。

「っ!お兄様目が回ってしまいわ!それに恥ずかしいからやめて!」

「ははは——!」

「もお〜お兄様〜!」

~~~~~

《占いの館》

「ふふ、いらつしやい。さあ、こちらの椅子にお座りなさい」

部屋の中に入ると神秘的な雰囲気顔の顔を隠した女性がいた。

「こんにちは、お姉さん。お姉さんがレン達を占ってくれるのかしら?」

「ええそうよ。お嬢さん達は何を占ってほしいのかしら?」

「そうねえ……。レンとお兄様の相性にしようかしら。お兄様それでもいいかしら?」

「ああ、いいよそれで」

「それでは……」

占い師が水晶玉に手をかざすと水晶玉はひかり、しばらくするとひかりがおさまった。

「愛多き青年と世の闇に寵愛されし少女……以前、青年によって少女はたしかな愛を得て家族となる……この先も二人は家族としてその愛を育んでいくでしょう……しかし、それ以上の関係を望むなら……少女は心の支えを増やす必要がある……私に見えたのはこんな所かしら」

「……まあ、レンと俺はずっと仲良しってことだな」

「そうね、わかりきってることだからちよつと期待はずれだわ」

「ふふ、それはごめんなさい……それじゃあ坊やにアドバイス。決められた道を行くのもいいけど、たまには違う道に行くのも考えてはどうかしら？」

「はは、そうだな。けど女性関係なら既に違う道を歩いてるんで」

「あらそうなの？あまり外れすぎると刺されるかもしれないから気をつけてね？」

「ご忠告どうも。それじゃあ行くぞ、レン」

「わかったわお兄様。またねお姉さん。久しぶりに会えて嬉しかったわ」

レンはリインの後を小走りですいていった。

「……ふふ、さすがね。まさかばれていたなんて……」